申すを聽きますれば、どうやら容易ならぬ不祥な事がありげにも存ぜられまする。

妃　呼入れてたも。（紳士役入る。妃傍を向いて）疵ある心には、些細の事さへも大凶事の前觸かと驚かるゝ。愚かなは覺えある身の狐疑、顯るゝを憚る素振に罪の證が現はるゝ。

以前の紳士役心狂ひたるオフィリヤをつれて入來る。

オフ　デンマークのお妃さまは何處にぢや？

妃　どうぞいの、オフィリヤ？

オフ　（歌ふ）

そちの殿御の其扮裝は
杖に草鞋に一しほ目だつ
笠につけたる帆立貝。

妃　あゝ、オフィリヤ、其歌の意は？

オフ　え、何といはします？　はて、まあ聽かしやりませ。

（歌ふ）今は此世にない方ざまよ、
足にや墓石、頭上には
いつも綠の八重もぐら。

妃　おほう！

オフ　いや、なう、オフィリヤ……
まゝ、聽かしやりませい。

（歌ふ）雪と見るよな蠟かたびらよ……

王クローディヤス入來る。

妃　あゝ、あれを御覽じませ。

オフ　（歌ふ）花でつゝまれ涙の雨に

濡れて墓所へしよぼ〳〵と。

王　オフィリヤよ、どうぢや、無事か？

オフ　あい、おかたじけにござります！　梟といふ鳥は麵麭屋の娘であつたといな。　今日の事は分れど、明日は如何なることやら。　御機嫌よういらせられませい。

王　亡父を思ふと見えた。

オフ　どうぞな、もう何もいはいで。　したが、もし何の事ぢやと問ふ人があつたら、ま、期ういはしやりませ。

（歌ふ）あすは十四日ワレンチンさまよ
門へ行こぞや、引明方に、
ぬしのお方になろずもの。
それと見るより門の戸あけて。

ついて手を取り引入れられたりや
純潔の處女ぢや戻られぬ。

王　てもいぢらしいオフィリヤ！

オフ　え、實！　誓文なしに、つゝともう歌うてのけよ。

（歌ふ）ほんに思へば、思へばほんに、
なんぼ殿御の習ひぢやとても
そんれはあんまりどうよくな。
男がいふには
おれも誓文その氣でゐたが。
一夜寢て見て氣が變はつた。

王　このやうに成つて久しいか？

オフ　何事もやがておめでたうなりましよ。　人は辛抱が肝腎ぢや。　というて

泣かいではをられぬ、冷い處に臥かされてござると思へば。　今に兄者が知らしやらう。　御深もじの御意見、かたじけなうござります。……さあさあ妾の馬車を！　……さやうなら、どなたも。　さやうなら、あなたも。　さやうなら〳〵。

オフィリヤ　入る。

王　彼れが後を追ひ、萬事氣をつけておくりやれ。……

ホレーシオ　入る。

王　おゝ、これこそは深き哀傷の弊毒、畢竟父を亡うたのが源ぢや。　おゝ、ガアツルード、ガアツルード、總別禍厄は、敵方の牒者の如く、一個では來らいで大擧して寄するが常！　ポローニヤスが非業の最期、自ら招いた科とはいへ、和子が海外への流寓、予思慮足らずして窃に死骸を埋めしため、愚民らが邪推の騒擾、オフィリヤが我歟の歎き、非情にひとしき狂氣の體、とりわけて心懸りは彼れが兄なるレーヤアチーズ、ひそかに佛蘭西より歸り來り、道路の蜚語に動されて深くも予を疑ふ樣子。　おゝ、ガアツルードよ、それやこれやに我胸は、石火矢の霰彈に撲たるゝ思ひぢや。

騒がしき物音聞ゆる。

妃　あら、あの騒ぎは？

王　スキッツルの力士は何處にある？

一人の廷臣入來る。

臣　何事ぢや？　彼等に戸口を固めさせい。……

急ぎ此場を落ちさせられませ。　大津浪の寄せたる如く、暴徒をひきゐてレーヤアチーズが、宮中へ亂入いたし、官人らを擊靡かし、唯今にも此處へ。暴徒は彼れを王と呼び、世界が新にはじまり、儀典も習慣も忘れられ、彼奴等ばかりが掟とも柱ともなつたがやうに、「レーヤアチーズ殿を王とするぞ、

我々共が推擧するぞ」と帽を投上げ、手を打叩き「レーヤアチーズを王とする、レーヤアチーズは國王ぢや。」と雷のやうに罵りまする。

妃　行くべき獸逕へは追うてもゆかいで、何を誇らしげに吠ゆることぞ！　おゝ、あらぬ途惑ひをする愚かなデンマークの獵犬ども！

王　や、戸を破つたわ。

レーヤアチーズ甲冑姿にて劍を提げて入來る。デンマークの暴民後よりつゞく。

レー　王は何處にをる？……かた〳〵は暫時それに控へてござれ。

暴徒　いや、我らも入りまする。

レー　何卒、先づ吾等にお任せ下され。

暴徒　心得てござる〳〵。

暴徒等は戸外へ退き去る。

レー　かたじけない。戸口を守りめされ。……おゝ、おのれ、非道の王。さ、父を渡せ。

妃　ま、落着きや、レーヤアチーズ。

レー　やあ、此期に及び落着く血が、只の一滴だにあるならば、此レーヤアチーズが身體は、我父の形見でなうて、奸夫の胤なりと淸淨潔白の母の額に淫婦の烙印を打つも同然。

王　何としたぞ、レーヤアチーズ？　かく巨人の荒れたるやうにも叛逆の企つるは？　棄置きめされ、ガアツルード。我身をば氣遣ひたまふな。國王の身邊には神々しい墻壁あつて、逆賊の窺ふとも、只垣間見るのみで志は能遂げぬ。……レーヤアチーズよ、なにとて斯樣に哮り狂ふぞ。……ガアツルード、棄置きめされ。……語れ、どうぢや？

レー　我父は何處にをる？

王　此世にはをらぬ。

妃　さりとて王の咎ではなし。

王　はて、存分に言はせたがよい。

レー　如何にして世を去つたぞ？　いつかな欺さるゝことではないぞよ。　君臣の盟約もけふを限りに地獄へ棄てた！　惡魔に與れた！　良心も信仰もあつたものかえ！　後世も無ければ現世も無いぞ。　さあ、此上は地獄の最底へ墮うとまゝ、存分怨を晴さにやならぬわ。

王　何とせばおぬしを抑へ止むべきぞ？

レー　予の意が諾と言はねば、世界中の力を以てもいつかな抑へることは出來ぬ。我力に限りはあつても、其限りある力を、見事十二分に使うて見せうぞ。

王　レーヤアチーズよ、父御の横死の顛末を審明にせうとお望みやるが、いざ

レー　復讐となつては、敵身方の辨別なく、善惡一攫に討たんず心か？

王　いゝや、目ざすは父者の敵ばかりぢや。

レー　すれば敵が知りたいか？

王　父の良友に對しては、まつ此樣に兩腕を開いて、子の爲に命を惜まぬペリカン鳥も同樣に、我血を絞つても饗應さうわ。

レー　はて、それでこそ孝子らしくもあるわい。　名士らしくもあるわい。　父御の横死については、予に曲事無きは勿論、深うも痛みをる所たるは、いさゝか分別のお爲やらば、日を見るがやうに解ることぢや。

暴徒　（奥にて）入らせい〳〵。

レー　何ぢや！　あの騷ぎは？

オフィリヤ前よりも一段取亂したる狂氣の體にて（いろ〳〵の草花を頭や襟に着けて）入來る。

おゝ、熱よ、我腦漿を乾し盡せ！　八しほに苦き此涙に、物見る力も爛れはてい！　やい、妹、そちが狂氣の此怨は、此兄が天に誓ひ、量に掛けたら秤皿の顛覆るまで報うてやるぞよ。　彌生の春の花薔薇！　いとをしの妹、なつかしの處女、可憐のオフィリヤよ！……て、情ない！　うら若い處女心も、老人の命同樣、かう脆う死ぬるかいやい？　性は愛慕によつて妙にもなるとか、其妙なる魂が、戀慕ふ影の後を追うて、歸らぬ處へあこがれたか？

オフ　（歌ふ）

顏もかくさいで柩車に載せて、
ヘイノンノンネー、ヘイノンノンネー。
墓にや降ります涙の雨が。……
おさらばでござります！

レー　正氣で敵を取つてくれいと、せがんだとても此樣には、予の心を動すまいわい。

オフ　かう歌はにやならぬわいな。

（歌ふ）ダウン、ナ、ダウン、もしか
ダウナと呼ばしやらば。

おゝ、何とまあよう似合うたぞ！　そのなあ娘を盜んだ不義者は其家の手代ぢやげな。

レー　たはいの無いのが、意あるより百倍ぢやわい。

オフ　さあこゝに迷迭香がある。　萬年も替らぬ證の記念ぢや。　これは

お前へ。　いつまでも忘れいでや。　それからこれが蝴蝶草ぢや、物を思へといふぞや。

レー　狂氣の中にも訓がある。　忘れいで物を思へとは有理。

オフ　さあ〳〵、（王に對ひ）御前には茴香の花と小田卷草。（妃に對ひ）お前には返らぬ昔を悔み草ぢや、妾も一つ取つておこ。　これをば安息日の惠の草ともいふぞや。　おゝ、着け方は更へてぢや。　それからこれが雛菊。　お前には、菫をば與したう思うたれど、父者がお死にやつたら悉皆萎れてしまうた。　めでたい往生ぢやと言うてぢや。……（欠ふ）

レー　戀し、懷しロービンさまよ。……

オフ　憂も苦痛も艱難も、焦熱地獄の苛責までも、なつかしらしう物しをるわい。（欠ふ）歸らしやんせぬかいな？

歸らしやんせぬかいな？

何の歸らしやろ、お死にやつたれば、

おのが命の際まで待とゝ。

お髯は雪の白々と、

頭は麻の亂れ髪。

またと逢はれぬ身の悲しさよ。

あの世を救うてたびたまへ！

皆さまの後世をも祈りますぞや。……恙なういらせられませい！

オフィリヤ　入る。

レー　あれを御覽せ。　ても情ない！

王　レーヤアチーズよ、其哀傷を吾等に分ちやれ、さらずば好意を無にする道理ぢや。　此上は汝の心に適うたる思慮ある輩を呼集へ、是非曲直を判せ

しめい。　假初にも彼等予に罪ありと申さば、此國も、此冠も、此命も、あり
とある我財寶をも償として汝に與せう。　さりながら、若し罪無しと定ま
らば、心を鎮めて予が言ふことをお聽きやれ、さすれば汝に力を協せてき
つと望をば遂げさせう。

レー　むゝ、さやう仕らう。　我父が非業の最期、あさましい埋葬式、遺骨を飾る記
念もなく、劍、紋章も懸けられず、何一つ表立つて儀式とても施さぬ其あさ
ましい葬式が、天から奈落へ達く程に怨憤の聲を揚ぐるからは、罪を糺さ
にやなりませぬわい。

王　はて、きやう致すがよい。　罪科のある處に報罰の斧を下しやれ。　いざま
づ諸共に奥へおじやれ。

王と共にレーヤアチーズ入る。

第六場　城内の他の一室。

ホレーシオと一侍者と入來る。

ホレ　予にあひたいといふは誰れぢや？

侍者　舟子どもでございます。　書面を持參したと申しまする。

ホレ　通さしめ。……

侍者入る。

世界の何處からも消息のありさうな當もない、ハムレット樣からでなくば。

舟子ども入來る。

一舟　御息災であらせられませい！

ホレ　おぬしたちもなう。

一舟　ありがたうございます。　お前がホレーシオさまのやうに承りましたが、それならこれがお前へのお手紙でございます。……英吉利へ往かしました筥のお使者からでございます。

ホレ　（讀む）

ホレーシオ足下、此書を披見せられたらば、此輩をして王に謁するの機を得しめよ。　王に献るべき書を携へたり。　海に出でゝ未だ三日ならざるに、我船は慓悍なる海賊に襲はれたり。　船足遲うして逃ぐるに術なく、止むを得ず勇を鼓して接戰し、予は賊船に乘移りぬ。　此時双方の船相隔たりしかば、予は賊の虜となんぬ。　賊の予を遇するや寛厚なりき、思ふに予によりて後に利する所あらんとするか。　王に予が書を献じおきて、足下は命を賭し中を飛んで忽々に我許に來れ。語らば足下をして啞とならしむべき許多の奇聞あれど、語は到底意を

盡すに足らず。　此輩をして案内せしめらるべし。　ローゼンクランツとギルデンスタアンとは英國へ赴けり。　彼等につきても語るべきことあり。　草々。

さゝ、持參の書面を陛下へ參らする手續をせう。　早うそれを果いて、予をば先方へ案内しておくりやれ。

足下の莫逆ハムレット。

共に入る。

第七場　城内の他の一室。

王とレーヤアチーズと入來る。

王　父御を殺いた者が予をも殺さうと企てた仔細が斯く明白となつた上は、もはや予を疑ふ心は釋けて、無二の信友とも予を思やるが當然ぢやぞよ。

レー　げに有理とも存ぜらるゝ。　さりながら斯樣な曲事をば、斯樣な容易ならぬ罪惡をば、何とて打棄てゝはおかれましたぞ？　安危を思しめす賢慮のござらば、打棄てゝはおかれぬ筈。

王　おゝ、それにこそは二條の仔細がある。　おぬしにはさまで肝要とも見えまいが、予に取つては緊い事ぢや。　先づ彼れが母たる妃は、彼れが面を見ねば殆ど能う生きてはゐぬ。　また予に取つては、德か不德かは知らず、妃は我命の綱ぢや。　星の星座を能う離れぬが如く、予また妃を離れては、恐らくは存へがたい。　次に、表立つて罪を問ひにくい第二の仔細は、彼れに對する愚民等が愛着ぢや。　彼等が量負目の浸すときは、化石泉の水を石に化するがやうに、如何な罪をも美德と化する。　されば生中に彼れを

罰せうと覘ふ矢は、世論の逆風に吹飛ばされ、弓を持つ手に跳戻るわさ。

レー　すりやそれが爲に、むざ〳〵大切な父を失ひ、剩へ妹まで狂人にしてのけたか！　遡つても褒めらるゝものならば、何一つ足はぬことの無い今古に匹儔稀な女をば！　見よ、此怨を報うてくれうぞ。

王　其儀ならば心安かれ。　口髭に火のつく危さを興がる程の虛氣者と吾等を思ふまい。　やがて改めて語らう。　予父御をもいとしう思へば、もとより我身をもいとしう思ふ、すればおのづから……

（書面を携へて使者役の者入來る。）

何事ぢや？

使者　ハムレットさまよりの御書にござります。　これなるは御前へ、これなるはお妃さまへ。

王　ハムレットよりとや？　何者が持參したぞ？

使者　舟子體の者の由に申しまする。　小官は逢ひませず、クローディオの手より受取りましたが、彼れは持參の當人より入手の由に申しまする。

王　レーヤアチーズ、お聽きやらう。……退れ。

使者入る。

（讀む）恭しく闕下に啓し奉る、それがし赤裸々にして罷歸りて候ふ。　謹みて乞ふらくは、夜明けて龍眼に咫尺し奉らんことを。　若し卑願をも許させられなば、其折此卒爾なる歸朝の更に奇異なる顚末をも上奏し奉らんと欲す。　畏みて白す。　ハムレット。

王　これはまた如何したことぢや？　餘の者も皆歸りをつたか？　或は根も無き譎詐か？

レー　書風にお見覺はござりませぬか？

王　ハムレットの手蹟ぢや。「赤裸々にして」……返し書にも「單身」とある。

レー　おぬしの意見は？

王　一向に合點が參りませぬ。　しかし歸朝は望む所。　さう聞いては萎へたる勇氣も百倍いたす、王子に面と打對つて「覺えがあらう」と糺し申さん。

レー　レーヤアチーズよ、若し歸國したが定ならば……如何にして歸國したか？　せぬとは思はれぬが……若し定ならば、予が意に從やるか、如何ぢや？

王　從ひませう、武士の名折となりませずば。

レー　名を立てさせうと思へばこそぢや。　彼れ氣まぐれにも中返りして、又と渡航せぬ心ならば、予彼れを說き勸めて豫て計畫置いたる一事を試みさせうに、彼れ之が爲に落命せでやは。　しかるも一言の惡評無く、現在の母妃までも、謀計とは心附かいで、不慮の變事と思ふであらう。

王　さすれば御意に從ひ申さう。　自然小官を事に當らせて下されうならば、一段でござる。

王　思ふ壺ぢや。　おぬしは豫て外遊以來、屢噂の種となつた、しかもハムレットの面前にて、とりわけ足下が堪能ぢやといふ其一藝について折々の取沙汰。　おぬしの才藝一切よりもハムレットは只それをこそ嫉ましう思うた樣子、予が見る所では、そは數ならぬものとも見えたが。

レー　と仰せらるゝ其藝は？

王　いはゞ、若人の帽子に着くる飾紐なれども、無うて叶はぬものぢや。　老後となれば養生と品格とを第一とした薫んだ服裝が似合ふやうに、若い者には端手な濶達な衣裳が似合ふ。　今よりは二月前、さるノオマンの武士が參つた。……佛人の馬術に長じたることは予は親しく戰場にて彼等と闘うて存じをるが、件の武士に至つては殆ど一種の神通力。　鞍壺に生着き、神變不思議に乘廻し、さながら駿馬と合體して人獸性を分けたがやう。　何ぼう想像を逞うしても、所詮其實には及ばなんだわやい。

レー　ノオマン人でござりましたか？

王　ノオマン人ぢや。

レー　一定、ラモンドでござりませう。

王　正にそれぢや。

レー　あの男ならば、よう存じをりまする。　彼れこそは彼の國人どもの國の盛飾にござります。

王　其男が兜を脱いで、おぬしが手練の噂をしたわい。　護身術の鍛錬といふが中にも、とりわけ細刃の扱ひにかけては、かりそめにも敵手となる者があらば觀物ぢや、いや、佛蘭西の劍客などは足下の向うへ廻つては、進退も攻防も着眼も何もあつたものでないとまでに圖なう賞めたわい。　此物語がハムレットに甚う嫉妬心を起させ、おぬしが不意に歸朝のして試合を致すやうの事あれかし、と切に希願ふに及んだのぢや。　さて之を緣とし

て……

レー　それを緣と致いて？

王　レーヤアチーズ、父御は眞實なつかしいか？　但しは涙は人前だけで、心と肚とは別々か？

レー　何故にさやうなことをば？

王　父御を愛する孝心が足下に無かつたとは存ぜねども、總じて愛は時によつて始められ、又時の爲に火勢を更む、是れ我他の親しく見聞する所ぢや。燃ゆる愛の焔の裡にやがては燃えさいて暗うなる燈心のやうなものが出來る。　凡そ物として長へに善なるは無い、何となれば善も過ぐるときは、爲に滅ぶ。　爲うと思ふ事は爲うと思うた時に爲すべきぢや、　さなくば此「思ふ事」がいろ〳〵に變化し、舌の數、手の數、事の數の世にある限り遷り變る。　さある時は、所謂「爲すべきぢや」も放蕩者の溜息同樣、生中一時

の心安め、所詮は其身の害ともなる。　それはともあれ、肝腎なはハムレットが歸國の一條、おぬし若し孝子たるの本分を言葉の外に證ぜんとせば果して如何な事を爲さんず心ぢや？

王　教會堂の眞中央にて王子が喉を搔切り申さん。

レー　何さま、如何やうの靈場とても、殺人の大罪をば能う庇ふまいぢやまで。

王　復讐に界は無い。　したがレーヤアチーズよ、もしさる決心のあらば、當分の間門外へは立出めさるな。　ハムレットの歸りなば、おことが歸朝の由告知らせ、まつた人をして足下が武藝を賞立てさせ、彼の佛人が言ひおいたる評判の上塗なし、とかくして彼れを煽り、究竟は双方に賭物して、試合をばさすことゝせう。　計略なんどは嘗つて知らぬ眞正直の粗忽者、劍を檢むることなどもすまじければ、おことと聊かの詐僞を以て、鋒圓めぬ劍を擇び、計略の一突にて父御の怨を晴らすは容易し。

レー　御意の通りに仕りませう。　まつたそのために劍に塗るべきものこそござれ。　小官嘗てさる野師より購ひ置いたる油藥、一たび尖鋒に之を塗れば、聊か微傷を負うたる者だに、必ずや命を落す。　月の下にありとある靈草を以て調製せる名膏の力でも救ひがたし。　小官其毒をば劍尖に塗り申さう、さすれば、微傷を負はいたるばかりにても、彼れを殺さんこと必定でござる。

王　尙此上にも案を凝いて、我目算に叶ふやうに、時機や方法の便宜を査べう。萬一にも手筈を誤り、それがため事露見に及ぶべくんば、初めより爲さぬに如かず。　されば此企には、よし先なるが破るゝとも立代つて望を遂ぐる後詰の工夫が無うては叶はぬ。……むゝ！　まて、暫時！……先づ表立つて双方の手練に賭物をなし……う、思ひついた。……一上一下の其間に體熱し口渇くは必定なれば。……もつとも然あるやう、故と激しう物しやつたがよいぞ。……すなはち彼れが何か飲料を求めう折の爲に、予は酒盃を準備しおかん、それを只一嘗せば、よし毒刃をばまぬがるとも、此方の覘は外れぬ。　やゝ、あの物音は？……

妃　あはたゞしく入來る。

妃　踵を接ふる不幸と不幸。……レーヤアチーズよ其方の妹は溺れて死にやつた。

レー　なに、溺れて！　おゝ、何處で？

妃　斜に生ふる青柳が、白い葉裏をば河水の鏡に映す岸近う、雛菊、いらぐさ、毛茸……褻なる農夫は汚はしい名で呼べど、清淨な處女らは死人の指と呼うでをる……芝蘭の花で製へた花鬘をば手に持つて、狂ひあこがれ

つゝおじやつたげなが、それを掛けうとて柳の枝に、攀づれば枝の無情うも、折れて其身は花もろともに、ひろがる裳裾にさゝへられ、暫時はたゞよふ水の面。　最後の苦痛をも知らぬげに、人魚とやらか、水鳥か、歌ふ小唄の幾くさり、そのうちに水が浸み、衣も重り身も重つて、歌聲もろとも沈みやつたといの。

レー　あら悲しや、妹は溺れ死んだか？

妃　おいなう、おいなう！

レー　これ、妹、水はたんとお飲みやつゝらうによつて、兄は涙は流さぬぞよ。というても癖ぢや、涙めが出をるわ。　笑はゞ笑へ、癖には勝てぬ。これが果てたら、女根性も出てうせう。……おさらばでござる。……烈火と燃立つ言分はあつても、此鈍なものに消されてしまふわ。

レーヤアチーズ泣きながら入る。

王　いで彼れが後を尾はう。　彼れが怒を鎮むるため夥しう骨を折つたわ！此事が原となつて再發すまいものでもない。　いで尾いて行かう、

王と妃と入る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第五幕

第一場　墓場。

甲乙二人の道外役、鍬、鶴嘴等を携へて入來る。

甲　すれば自業自棄で死をつた其女子を本式通りに葬るといふか？

乙　其通りぢや。　ぢやによつて、早う墓を掘つてくれさしめ。　お役人衆が檢分して本式にしても可いといはしつた。

甲　我身を庇うて身を投げたのでもないに、本式といふことがあるかいやい？

乙　でも、それがお役人さあの言渡ぢやわいの。

甲　いや〳〵、本葬式にせうには、どうあつても自身暴擧でなうてはならんわ。先づ眼目が如是ぢや。　予が自身も合點で身を投げるわ、えいか、それは所行といふもんぢや。　所行には三つ小分があるわ、第一を行ふこと言うて、第二を爲ることというて、第三を成すこと言ふわ。　かるが故にぢや、あの女子は、結句自身合點の上で身い投げたものとせにやならんわ。

乙　まあさ、小父さあ、そりやもう然もあろけれどな……

甲　ま、またしめ。　此許に水がある、えいか、此許に人が居るわ、えいか。　もしか此人が此水へ自身で往て身を投げたならば、好かうとも好くまいとも、そりや自身で往たのぢや。　が、えいか、こゝが肝腎ぢやぞや。　もしか其水が彼方から此方へ來て、其人を溺いたならば、こりや入水ではないわ。かるが故にぢや、我と我身で命を縮めぬ分には、自殺といふことにやなりやせぬわい。

乙　それがお上の御法かいの？

甲　さればいやい、これが檢屍方の御定法といふもんぢや。

乙　實そ眞實の事を言はうかいの？　身分の良い衆であればこそぢや、地下の女子なら、これが何で本葬式になろぞい。

甲　出來た！　それよ〳〵。　身分の高い衆ほど、平の信者に比べて、首縊るにも身投げるにも便宜の多いのが笑止ぢや。……どりや、仕事にかゝろかい。誰れの家柄が古い言うて　庭師と溝掘と墓掘ほど古いお武家はありやせん

わい。　アダムさあのお職掌を其儘に繼いでゐるのぢや。

乙　アダム様はお武家様でござらしたかいの？

甲　はあて、最初めに御定紋（道具）を附けさつした人ぢや。

乙　アダム様には定紋はありやせぬがや。

甲　や、おどれは邪宗門か？　お聖書の中に「アダムが掘らしつた」とあるわさ。道具（お定紋）が無うて掘れるかいやい？　序に今一つ問うておまそ、おのし此返答が出來んやうなら、まつすぐに白狀して……

乙　まあさ！

甲　石工より、大工より、船大工より、もそつと堅固なものを作るのは誰れぢやい？

乙　絞罪臺を作る人ぢやろ、主が千人と交代つても破壞りやせぬがな。

甲　こりや中々旨いことを言ふわい。　絞罪臺は可い。　可いは可いが、何の爲に可い？　惡い事をしをる奴を懲らしめる爲には可いが、教會堂よりも堅固ぢやなんぞいふは、甚惡い事ぢやによつて、絞罪臺は結句おのしのやうな奴に可い。　さあ、修正ぢや。

乙　「石工より、大工より、船大工より、もそつと堅固なものを作るのは誰れぢや」つてかや？

甲　さうぢや。　早う解いて荷い下せ。

乙　や、解せたわ。

甲　何と？

乙　はれ、解せぬわいの。

遠く向うへハムレットとポレーシオと入來る。

甲　もう鈍腦を撲たぬが可い。　阿呆馬は何ぼ叩いても驅出しやせぬわい。此度此謎を掛けられたら、墓掘男ぢやと言はしめ。　はて墓掘男が作る家

は、大審判の日までも繼續くわさ。　やい、早うヨーハンの許へ往て、酒を一壺取つて來いやい。

乙の道外役入る。　甲は墓を掘りながら小歌を歌ふ。

おらも若い時や色戀もしたが、
色は浮世のなぐさみなれど、
時が約れば、オヽ此身の、アヽ爲かよ、
今ぢやそれもこれもあほらしい。

ハム　彼奴はおのが爲る事をば何事とも辨へをらぬか、墓を掘りながら歌ふとは？

ホレ　慣れて平氣になつたのでござりませう。

ハム　まつたくさうぢや。　使ふことの少ない手は細かしいことにも感ずるわい。

甲　（歌ふ）

いつの間にやら年波や寄せて、
おらが首玉しつかと掴む。
果は島根に拋げあげられて、
變り果てたよ如是ものに。

と歌ひつゝ頭蓋骨を拋上げる。

ハム　あの髑髏にも舌があつて、曾ては唄なども能い歌うたであらうものを、元祖の殺人者カインが顎骨でゝもあるやうに、彼奴めが叩きつけをる。　今こそは如是匹夫に翻弄せらるれ、或は昔は、神の目をもくらまいた策士の頭かも知れぬわい、なうホレーシオ。

甲また骨を拋上げる。

ホレ　かも知れませぬ。

ハム　或はまた殿上人などの頭で「や、これはお早うおはす、某殿！　いかに渡ら

せらるゝ？」なぞというたかも知れぬ。　或は此頭が、後で與いといはう爲ばかりに、甲某殿の馬を激賞てた乙某殿であつたかも知れぬまでい、なう

ホレ　ホレーシオ。

ハム　御意にござりまする。

甲　はて、正にさうぢや。　しかるに今は只蛆蟲の典侍の所有。　願も無うなつて寺僕の鍬の刃で腦天を打叩かるゝ。　ても幽妙な有爲轉變、吾々人間の目にこそ見えざれ。　あゝ、これらの骨どもは斯く抛棒戯に使はるゝ爲にのみ養成てられたか？　考へると胸が痛うなるわい。

（歌ふ）

鍬に鶴嘴、鶴嘴に鍬に、
附けて添へたが蠟帷子よ。
土の住居を造らうために、

如是お客にやそれ相應の。

と又一つ髑髏を抛上げる。

ハム　又一つ。　此頭がさる代言人の髑髏であるまいものでない。　あゝ、彼れが得意の推脱や詭辯や裁判例や所有權や騙詐は如何なつたか？　何故此樣な農夫に泥まぶれの鍤で腦天を打叩かれながら默つてをるか？　何故毆打の訴訟を起すぞといはぬか？　ふむ！　或は此男存生中には澤山田畑を買取り、スタチュートとか、リコグニザンスとか、乃至終結讓與、二重證人、返納讓與なぞと持つて廻つた奴でもあらうに、あゝ、かく無慚にも土を盛られて、頭蓋骨を抛出さるゝが、其所謂終結讓與の終結であるか、返納讓與の返報か？　所謂證人も最早彼れの買收權に關して何等有利の證言もしてはくれぬか、二重證人があつても只一葉の契符だけの役にも立たぬか？　此函の中には地所讓渡の證文さへもあるまい。　え、讓受けた當人

さへも如是る有樣とならねばならぬか？

ホレ　御意の通りにござります。

ハム　證文用紙は羊の皮で製るかなう？

ホレ　中々、犢の皮でも製しまする。

ハム　さやうな品を當にするは犢や羊の行爲ぢやわい。……彼奴と問答して見う。

……（甲に對ひ）其墓は誰人のぢや？

甲　予のでござります。……（歌ふ）

土の住居を造らうために、

如是お客にやそれ相應の。

ハム　いかさま、汝のでもあらうわい、其穴に入つてをるからなう。

甲　これはお前樣のではおりない、今餘所から入つてござらしたばかりぢやに

よつて。　予は此穴へ這入つてはをりやせんが、こりや予のでござります。

ハム　其穴に入つてゐて、汝のぢやといふは解えぬわい、死人が物を言はうか？

何と、解えたか？

甲　聞えたかと問はつしやるのは聞えたが、解えぬと言はつしやるのは解えぬ。

それ、また御手許へ御返禮ぢや。

ハム　汝や何者の爲に墓を掘るのぢや？

甲　物の爲ではおりない。

ハム　はて、何處の人の爲にと聞くのぢや。

甲　人の爲にでもおりない。

ハム　すれば何を葬るのぢや？

甲　生きとる中は女の人ぢやつたが、なんまみだぶ、死ねてしまひましたがな。

ハム　此奴め、七むづかしい奴ぢや！　辭令表でも見比べて物を言はぬと、忽ち

擧足を取らるゝわい。　誓文、ホレーシオ、此三年以來心附いたことぢやが、

時勢がおひ〳〵尖つて來て　今は農夫の爪先が　殿上人の踵に達き、凍傷を摩するほどぢや。……（甲に對ひ）汝やいつごろから墓掘男にはなつたぞ？

甲　一年三百六十日の中で、予が此仕事にかゝつたは、先のハムレット王樣がフォオチンブラスに勝たゞしやりました日でござります。

ハム　してそれは最早何年になるぞ？

甲　それをお前樣知らしやらぬかいの？　どのやうな痴人でも知つてをるがや。　若ハムレット樣が生れさつしつた日ぢや、それ、氣の狂うて此間英吉利へ遣られさつしたハムレット樣の。

ハム　うん、さうか？　何でまた英吉利へは遣られたのぢや？

甲　はて、氣の狂つたによつて。　彼國にゐめされば、定、正氣に復らつしやらうず。　復らつしやらぬてゝ關ふことはおりない。

ハム　なぜぢや？

甲　彼國ならば目立つまいがな、傍が皆狂人ぢやによつて。

ハム　ハムレットどのは何として氣が狂うたのぢや？

甲　それが苛う不思議ぢやて言ひますわい。

ハム　どう不思議ぢや？

甲　ほんの事ぢや、正氣をなうしてしまはしつたといの。

ハム　いやさ、其因由は何ぢや？

甲　はて、本來は王子樣ぢやがな、此デンマーク國の。　予こゝに三十年をりますぢや、小兒の時分から。

ハム　人は地に入つて腐るまでに何年經るぞ？

甲　さいの、前から腐つてさへをらねば……近時は瘡毒の死骸が澤山來まする、其奴あ迚も耐たんが……腐つてさへをらねば、八九年は耐ちましよかい。柔革屋は九年は耐ちましよ。

ハム　何故に柔革屋は久しう耐つか？

甲　はあて、お前様、商賣柄で皮が柔いてあるによつて、大分の間水を彈きまする。　がいに死骸を腐らせるのは、先づ水でござります。……これ、此髑髏は、二十三年も土の中に入つてをりますのぢや。

ハム　それは誰れのぢや？

甲　ろくでなしの氣狂和郎のでござります。　たれのぢやと思はしやりますか？

ハム　いや、知らぬわ。

甲　氣狂和郎め、時疫にでも罹りをれやい！　此奴は昔時予の頭へ葡萄酒を一壜浴びせをりました。　はて、此骸骨はヨリックの髑髏でござります、王様の侏儒でござりましたわい。

ハム　え、これが？

甲　中々。

ハム　見せい。（髑髏を手に取りて）……はれ、憫然なヨリック！……ホレーシオ、予は此者をば存じをつたが、戯謔にかけては眞に窮極る所を知らぬ、いや、拔群な奇想に長じた奴。　予をば幾千度も脊に負うて歩いたものぢや。　それを今にして想ひ起すと、厭らしうも怖しうもあるわい！　えゝ、胸が惡くなる！　此邊に唇があつたのぢや、それに幾たび接吻をしたか知れぬ。……こりや、汝の惡まれ口は如何したぞ？　道外踊は？　歌は？　滿座を笑ひ顛覆らせた滑稽戯謔は何としたぞ？　齒を露出いた此顏を誰一人相手

にするものも無いか？　笑ふことさへも出來ぬか？　こりや、今、姫達の部屋へ參つて、如何な厚化粧を施いても、假令一寸程厚うても、所詮は如是顔にならねばならぬと言うて笑はせて來たがよい。……ホレーシオ、聞きたいことがある。

ホレ　何事でござりまする？

ハム　アレキサンダアも地中に入つては、やはり此樣に見えたであらうかの？

ホレ　でござりませう。

ハム　そしてまた如是臭氣が？　ペッ〳〵！

と髑髏を下におく。

ホレ　さやうにござりませう。

ハム　死んだ後には如何なあさましい用に使はれうも知れぬなう！　想像で辿つて見れば、アレキサンダア大王の遺骨とても、塵や土と化した末には、酒

樽の穴塞なぞに用ひられまいものでもない。

ホレ　さうお考になりまするは、御穿鑿過にござりませう。

ハム　いや、そつとも。　穩當に考へて然ぢや、有るらしいことぢや。　先づ斯うぢや、アレキサンダアが死ぬ、埋葬する、塵埃と化する、塵埃といふは土ぢや、土から粘土が出來る、そこで其アレキサンダアの化成たるに外ならぬ粘土を以て麥酒樽の栓とすることもありげではないか？

萬乘の該撒も粘土と化しては、
徒らに風前の罅隙をや塞がん。
あはれ〳〵、嘗て世を震駭せし土、
今は只嚴冬に破壁をつゞる！

や、しづかに！　彼方へ！　あれ、王が來るわい。

僧官其他行列を正して入來る。　オフィリヤの遺骸を先に、レ

ーヤアチーズ及び哀悼者多勢、王、妃其他從臣等。

妃をはじめ殿上人。　何者の葬送ぢやな？　剩さへ不具の儀式は？　疑ひもなく、こりや當の亡者は、亂心の餘り自殺をしたといふ標章ぢや。　身分の低うない者でがな。　暫時かくれて樣子を見う。

ホレーシオと共に物蔭へ退く。

レー　外には式とてもござらぬよな？

ハム　あれはレーヤアチーズぢや、立派な若者ぢや。　なう。

僧長　妹御の御葬儀は、宗法の許し申す限り、鄭重に仕つておじやる。　御最期が疑はしうござつたによつて、大命のござりませずば、斯程恒例を曲ぐることも致さず、何の式も行はいで葬り、審判の喇叭の響くまで其儘に致しおき、まつた石、瓦、礫のたぐひを、後世を願ふ禱の代りに、死骸の上にも拋下くべきを、處女相當の花冠、式の如き撒花、鐘を鳴らいての送込までも許されましたは、何れも格外の處分でおじやる。

レー　すればば以上には最早何も叶はぬと被言るか？

僧長　此上には叶ひませぬ。　正しう世を逝つたる人々と同列に、これなる亡者に喝を唱へて安樂往生の勸め申すは、葬禮を瀆すの畏れ。

レー　土の中へ遺骸を入れい。……淨い美しい妹の肉中から、菫が生えいでゝ咲けいやい！……やい、情知らずの僧官どの、おぬしが悶轉つて吠える時分に、一定妹は天人ともなつてをらうぞ。

僧侶の一群入る。

ハム　や！　すりやオフィリヤが？

妃　（花を墓上に撒きて）いとしい人にいとしい花を。　さらばぢやー　和子ハムレットの妻ともならせます日を賴うでゐたに。　いとしいオフィリヤよ、そなたの新床を飾らうとこそは思うたれ、墓地に花撒かうとは夢さら。

レー　おゝ、三重の禍災よ、十倍、三十倍ともなつて、殘忍な行爲して汝の正氣をば顚倒させた彼奴の素頭に落下れ！……待て土を、暫く待て、も一度妹を抱かねばおかぬわ。

と墓穴の中へ躍り入る。

ハム　さあ積め、土を積め、生身と死身の用捨は要らぬ、積んで〳〵積上げて、此平地の中央へ、ペリオンはおろかオリンポスの雲に冲る大峯をも、眼下に瞰す山を作れ。

（進み出でゝ）やあ、何者なれば業々しき其高言！　汝が哀悼の語には、間斷無う廻る天の星も耳を駭かいて停止らうぞ。　予こそはデンマークの王嗣ハムレットぢやわい！

と同じく墓穴へ躍り入る。

レー　おのれ、奈落に落ちをれやい！

ハム　そのつれな事を言ふは爲になるまい。これ、喉の手を放しめさ。　予は怒り易うも無う、まつた粗暴でもなけれど、いざとなれば怖しいこともしかねぬによつて、用心するが利根であらうぞ。　放せ！

王　兩人を引分けい。

紀　ハムレットや、ハムレットや。……

多勢　お二人とも……

ホレ　まづ〳〵、お鎭りあらせられい。

侍臣等二人を引分ける、二人とも墓穴より出來る。

と二人掴み合ふ。

ハム　はて、此事だけは、予の眼蓋の動く間は、彼奴と爭はずにはおかぬわい。

妃　おゝ、ハムレット、此事とは？

ハム　オフィリヤを愛するそれがしの心の深さは、四萬人の實の兄が思ふ限りの愛を以ても決して及ぶことではないわ。……やい、汝はオフィリヤのために如何な事をする積ぢや？

王　こりやレーヤアチーズよ、ありや狂人ぢや。

妃　どうぞ堪へてたも。

ハム　さあ、誓文、何を爲よう氣か、それを見せい、泣かうとか、闘はうとか？斷食せうとか？　うぬが身を裂かうとか？　酢を飲まうとか？　鰐を食はうとか？　はて、予もして見せうわ。　汝は吠えうとて此處へお來やつたか？　墓穴へ躍込うで予の面目を潰さうとや？　何ぢや、一所に埋められたい、はて、予も一所に埋められうわい。　山の高言を並べうなら、三人

の頭の上へ億萬坪の土をも積め、積んで〳〵積上げてオッサの高峯も荒かと見え、盛上つた大地の頂が日輪の火で焦げるまでも。　いやさ、高言を吐かうなら、予も負は取らぬわい。

妃　こりや全くの亂心ぢや。　暫時あゝしておいたなら、やがては母鳩が黄金色の雛を孵いた時のやうに、おしだまつて鎮靜らうわいの。

ハム　これ、レーヤアチーズ。　何故に足下は予を此樣に扱ふのぢや。　予は足下を愛してをつたに。……はて、關ふことはない。　ハアキュリーズが有りたけの力を盡いても、猫は猫、犬は犬ぢや。

王　と　ハムレット　入る。

太儀ながらホレーシオ、彼れが左右に。……

ホレーシオ　入る。

（レーヤアチーズに對ひ）昨夜言うたことを賴となし、今しばらく堪忍しやれ。

やがて彼の事を試う。……ガアツルードどの、和子に心を附けさしませ。……何れ此墓所には不死の碑を建てさせうず、すれば天下はおのづと泰平。まづそれまでは、何事も堪忍、堪忍。

皆々入る。

第二場　城内の大廣間。

ハムレットとホレーシオ入來る。

ハム　其事はそれだけぢや。さて他の一條ぢやが、一伍一什を記えておゐやるか？

ホレ　記えてとおつしやるは？

ハム　いやなう、予心中に苦悶あつて、如何にしても眠りがたく、鐵枷に呻吟する暴徒にも劣る境涯よと歎ずるうち、ふと向不見に思立つて……あゝ、これぞ向不見の功德といふもの……深う計つたる事の敗るゝ場合に、一向の無分別が却つて大功を立つることがあるぞよ。荒削は人間がせうとも、所詮の仕上は神力ぢやわい。

ホレ　それは一定の儀にござります。

ハム　そつと船室から起出で、海上用の外套を引掛け、暗中を探り探つて、目指す一品を求めたるところ、幸ひに望が叶うて、件の包をば手に入れた。すなはち我室へ立戻り、身を思ふの餘り、作法なんどを顧る遑なく、大膽にも彼等が承り參つたる大命の書どもを開封のしたる處、何とホレーシオ……驚き入つた王が奸計！……デンマークの爲にも、英吉利の爲にも、ほつー予を生かし置くは、怖しき事の限りなれば、此書一覽次第、寸時の猶豫も無

く、斧を磨ぐ間もあらせず立地に予が首を打落せと、種々様々な口實をば繕ひ立てし王が嚴命。

ホレ　あらう事とも存ぜられませぬ！

ハム　其書面はこゝにある、後でゆつくり讀んだがよい。　さて其折、予が何と致いたかを話さうか？

ホレ　何卒。

ハム　まつ其如く、惡漢共に取圍まれたる絶體絶命……まだ腦中に是といふ開場詞さへも出來ぬうちに、智慧が働いて、活劇をば演じはじめた。……すなはち予は座に着いて、新に國書を案文し、筆跡も見事に書認めた。　嘗ては世の經世家と同じやうに、字を能う書くことなどは取るに足らぬ事と思うて、一旦習うたをも強ひて忘れうと力めたこともあつたが　今度こそはそれが忠僕の勤務をしたわい。　さて、何と書いたかゝ知りたいか？

ホレ　中々、承りたうございます。

ハム　王より英吉利王に宛てゝ懇なる依頼狀、……そも〳〵英吉利は忠誠無二の屬國なればとか、兩國の信義は常磐木の如く榮ゆべき筈なればとか、平和の神は常に小麥の花冠を戴いて兩國好誼の媒たるべければとか……かゝる負擔重き幾多の駑馬を列べ記し、書中一覽の上は最早寸分の躊躇もなく、懺悔をだに許さずして　此書持參の兩人をば立地に誅戮せらるべしと認めたわ。

ホレ　して御印は、何となされました？

ハム　はて、それにもまた天の配劑。　予平生隱袋の裡に、父王の印璽を所持しをつたが、それぞデンマークの國璽の模型。　すなはち我認めたる命令書を式の如くに疊み、署名もし、捺印もして、安全に前の處に入れて置いた、取換兒とは誰れにも知られず。　さて次の日が海上の戰鬪。　其後の事共は

既にくはしう承知の筈。

ホレ　すりやギルデンスタアンやローゼンクランツはさやうな身の果。

ハム　はて、此處の役廻りを我から求めた彼奴等なれば、予は苛酷いとも思はぬわい。　滅亡は自業自得ぢや。　勇士が互ひに奮激して火花を散らす自刃の間へ匹夫下郎が入るのは兎角危いものぢやわ。

ホレ　さて〳〵驚き入つたる王の振舞！

ハム　何と此上は、當然の事では無いか……我父王を弑し、我母を弄び、我登極の望を遮り、剰さへ如是奸譎なる手段を以て我一命まで釣らうとせし奴……かゝる奴を誅戮なすは天の命ずる所ではないか？　かゝる人間の蝨賊を生けおいて、更に害毒を長ぜしむるは、それこそ墮地獄の大罪ではないか？

ホレ　程なく英吉利表より、かなたにての事の次第を、一定、王の許へ申越すでご

ざりませう。

ハム　いかにも程なく。　其時までは我有ぢや。　人の命は「一」と言ふ程の間さへも無い。　それはさうと、ホレーシオ、予はレーヤアチーズに對し、我れを忘れ、無禮を働いたを後悔するわい。　我身の上に引當て、彼れが心根を思ひやる。　中直りをしてくれいと言はう。　とはいへ、餘りに業々しう歎きをつたゆゑ、何ぼうにも堪忍がならなんだわ。

ホレ　あもし！　誰れやら參りました。

（廷臣オスリック入來る。）

オス　殿下にはようこそ御歸朝遊ばされました。

ハム　かたじけなうおじやる。……（ホレーシオに對ひて）此水蠅めをお知りやつてか？

ホレ　（ハムレットだけに）いや、存じませぬ。

ハム　（ポレーシオだけに）すりや予よりは運がよいわ、あのやうな奴を知つてをることは曲事ぢやまで。　彼奴は良い地面を澤山有つてをる。　牛馬でも、牛馬中の領主となれば、隨分國王の食卓へ秣槽を持込むことの出來る時勢ぢや。

オス　彼奴は阿呆鳥ぢやが、泥土だけは、今もいふ通り　澤山有つてをるわさ。

ハム　憚りながら殿下、自然御問暇に渡らせられまするならば、陛下より御申附の儀を啓したうございます。

オス　おゝさ、謹み畏んで　承りませうず。　ま、其帽子を正當に用ひめされい。

ハム　それは頭に載せておくものぢや。

オス　忝うございまするが、酷う暑うございます。

ハム　いや〳〵、今日は酷う寒い、北風ぢやによつて。

オス　成程、隨分とお寒うございまする。

ハム　したが、酷う蒸すによつて、予のやうな體質には暑いやうでおじやる。

オス　殊の外物でございます。　酷う蒸しますので、……どうやらその……物でございまする。……いやなに、陛下より仰附られましたる儀は、此度陛下に於せられて、洪大なる御賭を殿下のお爲に遊ばしました儀を啓し奉れでございまする。　えゝ、其仔細は……

ハム　どうか、今言うたことを……

ハムレットはオスリックに帽子をかぶれと手で指圖する。

オス　いや、全く。　全く勝手にございまする。　えゝ、新歸朝のレーヤアチーズどの儀は、實に彼人こそは何一つ缺所も無い名士でございまして、拔群な種々の長所を具へをられ、應對振も嫻雅かでございれば、擧止風采も立派で、いや實に剴切に論評ひませうならば、活きた禮儀の早見表乃至作法の撮要錄ともございませうか、かりそめにも士君子たらん者の望みまする限りの諸の美德をば、彼人は兼備へをられまする。

ハム　評し得て遺憾なしぢや。　もつとも彼れが長所や才能を一々分析しはじめたなら、你り數の多さに記憶力が狼狽して、どう追驅けて見ても先方の船足が速いので、つい乘遲れとなるでもあらうが。　いや、眞の事ぢやが、予は彼れを大器量人と信じをるわい。　彼れが天分は、何ぼうにも貴く有りがたいによつて、物に喩へて評せうと思うても、似た物とては鏡に映る彼れ自身の影ばかりぢや、況んや彼れの模倣をせうとする輩なぞは、只もう彼れが影坊師たるに過ぎぬわ。

オス　殿下の御評言は周到適切にござります。

ハム　して理由は？　いやさ、かやうな拔群な君子人を何故に蕪辭を以て推讃するのぢや？

オス　へ？

ホレ　他の口では解せませぬかな？　はて、解せませうずに。

ハム　彼人の噂をめされたは何の爲ぢや？

オス　レーヤアチーズどの〻？

ホレ　（ハムレットだけに）財布がもう空になつたのでござります、金言を費ひ果しましたので。

ハム　（オスに對ひて）いかにも彼れの。

オス　豫てもお知識のあらせられまする通り……

ハム　いや、無いかも知らぬまでい。　あつたところで格別嬉しうもおじやらぬ。

オス　さて？

ハム　お知識のあらせられまする通り、レーヤアチーズどの長所の儀につき……いや知つてをるとは能い言はぬわ、彼れに劣らぬといふ自負自慢に類するのが厭ぢや。　善く人を知るは自ら知るの謂なりとある。

オス　小官が申すのは、武器にかけてござりますが、俗の評隲に因りますれば、

ハム　彼人の此長所は、天下無雙ぢやげにございます。

オス　武器は何か？

ハム　細刃と短劍で。

オス　それは彼れが武器中の二種ぢや。　が、さて……

ハム　さて、陛下には彼人に對してバーバリー馬六頭を賭けさせられましたる所、

オス　それに對して彼人質とせられましたは、承る所によりますると、佛蘭西製作の細刃と短劍合せて六口、幷びに飾帶、劍鉤なんどいふ附帶品。　就中釣懸機三箇は、優美の製作で、第一欄との調和もよろしく、風流を極めましたもので、雅致を盡いた細工にございます。

ハム　釣懸機と被言るは？

ホレ　（ハムレットだけに）とくと御合點なさるゝまでには、何れ注釋書がお入用と存じてをりました。

オス　釣懸機と申すは劍鉤のことでございます。

ハム　腰に大砲でも垂下げてあるくやうになつたら、其樣な言葉も似合はうが、まづそれまでは劍鉤であつてほしい。　が、それから。　六頭のバーバリー馬に對して六口の佛蘭西劍、其附帶品竝びに雅致を盡いた釣懸機か。　とりも直さずデンマーク對佛蘭西賭ぢやの。　なんで如是なものが、御身が言はるるやうに、「質とせられた」のぢや？

オス　えゝ、陛下には、殿下と彼人と十二合お手合せあらせられまする間に、三たびの中以上を彼人の能い贏つことはあるまいとあつて、すなはち九に對する十二と賭けさせられ、自然殿下に於せられて　お立合を許させられまする

ハム　ならば、直にも御試合を催させられませうやうとの叡慮にございます。

オス　立つて逢ふのは否ぢやと言うたらば、如何ぢや？

ハム　いや、武藝のお手合せを遊ばされますることを申しましたので。

ハム　此室内を歩いてゐよう。　御意とあらば、恰ど予が遊技の時刻でもあるによつて、試合劍をこゝへ持參したがよい。　彼人にも異存なく、王の御意も變らぬならば、成るべくは勝ちもせうぞい。　爲損じたら、めつたに突かれて恥を曝すばかりのことぢや。

オス　その通り復命いたしませうや？

ハム　おゝさ、潤色はお心任せぢ。

オス　長へに臣が微衷を殿下に薦め奉りまする。

ハム　過分々々。……

オスリック入る。

ホレ　自分と自身を薦め奉るも當然ぢやわい。　彼奴の爲には誰一人口を利く者もあるまいによつて。

ホレ　あの鳧は尙殼が取れぬ癖に善う走りますす。

ハム　彼奴は乳を吸ふ前に乳房に辭儀をしをつたらう。　彼奴をはじめ、總別澆季の世に歡び迎へらるゝ小鳥どもは、縄に時代の調子を手に入れ、辭儀口儀の只皮相を能う諳んじたに過ぎぬわい。　泡沫同然の似而非學問で、簸別け、扇ぎ別けて七むづかしい世評の中をも潜り脱けをる。　したが只一吹ふいてお見やれ、石鹼玉が消ゆるわ。

一紳士役入來る。

紳士　殿下、陛下先刻オスリックを以て思召を薦めさせられましたる所、同人立歸り、殿下お廣間にてお待受の旨を復命仕りましたるにつき、右レーヤアチーズとお立合の儀尙御異存のござりませぬか、或は御延期などにもござりませうや、承り參れとの御諚にござります。

ハム　予が心は變らぬ。　王の御意次第ぢや。　御都合さへ宜しくば、此方はいつでも宜しい。　今でもよし、いつでもよいは、予の境遇に異變なくば。

紳士　兩陛下をはじめ御一同、只今お渡りにござります。

ハム　ちようどよい。

紳士　お妃より殿下に望ませられまするは、お立合に先だちまして、何卒レーヤアチーズどのに對し、御和睦の御挨拶どもござりまするやう。

ハム　御庭訓かたぢけなう承つたぞ。

紳士役入る。

ホレ　此賭は御不利にござりませう。

ハム　いや、さうは思はぬ。彼れが佛蘭西へ參つて以來、予も絶えず修行したわ。まつた數違ひなれば勝たうぞよ。……とはいへ此胸が、何としたか甚う堪へがたなう惱ましい、よもやおぬしは……なにさ、かまうたことでない。

ホレ　はて、それは何となされたので……

ハム　わつけも無いことぢや。恐らく婦人などならば、氣にもかけうずることぢやわい。

ホレ　お心が進みませぬならば、お止になされませい。兩殿下のお渡りをお止め申し、お障りの由を申しませう。

ハム　何の〳〵。前兆なぞを氣にやせぬわい。雀一疋落つるにも天の配劑。今來れば後には來ず、後に來ずば今來う　よし今は來ずとも、いつかは一度來うずによつて、何事も覺悟が第一。殘いてゆく世が我世でなくば、早う死なうとも何の事も無いわ。棄てゝおきやれ。

王、妃、レーヤアチーズ、殿上人多勢、オスリック及び他の從臣、試合用の劍、籠手等を携へて入來る。酒瓶を載せたる卓子をも運び來る。

王　さゝ、ハムレット、こゝへお來つて此手をおとりやれ。

王はレーヤアーズとハムレットとを握手さする。

ハム　なう、予が罪を赦しめされ。　無禮を働いたなれども、御身君子人たるからは、過ぎたるをば赦しめされ。　列座のかた〴〵も知らるゝ通り、まつた御身とても聞かれつらんが、予は狂氣の爲に痛く身や心を苦めたり。　御身の情を害ひ、名を思ふ心を傷け、まつた義憤を立たせたは悉皆亂心がさせた事ぢや。　ハムレットに於ては、未だ曾てレーヤアチーズに無禮を加へたる覺えは無い。　若しハムレットにして本心其身を離れ、彼れにして彼ならざる時に無禮をレーヤアチーズに加へたりとすれば、それはハムレットの所爲ではない。　ハムレットにはさる覺えは無い。　すれば誰が所爲ぢや？　狂氣の所爲ぢや。　すなはちハムレットみづからも害を蒙つた一人ぢや、狂氣は不幸なハムレットみづからの仇でもおじやるわ。……かうかた〴〵の面前にて、底意なく誓言のする上は、往る日の過失は、屋根越しに矢を放つて圖らず同胞を傷けたる一時の粗忽と恕しめされ。

レー　其お詞にて怨は晴れ、情だけは釋けましたが、武門の面目は格別、然るべき長者の和解によつて、それがしが名折とならぬやう、立派な先蹤ども示されませぬうちは、いつかな和睦は仕りませぬぞ。　まづそれまでは御懇情をば、お言葉の儘に、いたゞいておくでござりませう。

ハム　此上は隔心なく、お互ひに心を許いて、同胞づくの試合をせう。……試合劍を持て。……いざ。

レー　いざ、こちへも。

ハム　レーヤアチーズ、をさない予が技は、象眼の地板も同然ぢや、おことの手練が照返されて、暗夜の星のやうに輝かうぞ。

レー　戯言をおほせらるゝ。

ハム　いや、神以て。

王　オスリック、兩人に劍をとらせい。……ハムレットよ、賭の義はお知やつてか？

ハム　なか〳〵。陛下には弱い方へ重い賭物を遊ばいたさうな。

王　双方の手並を知つたれば、懸念はせぬ。もつともレーヤアチーズの上達を思うて、數違ひにしておいた。

レー　こりやちと重いわ。他のを見せい。

ハム　これが氣に入つた。……長さには異りはないか？

オス　御意にござりまする。

二人立合の身支度する。

王　それなる卓子に酒瓶を据ゑい。……もしハムレットが第一合か第二合か乃至第三合に於て相手方に報ゆるを得ば、あらゆる壘壁より祝砲を放たしめ、王はハムレットが未來を祝うて酒盃を擧げうぞ。まつた酒杯へは四代のデンマーク王が寶冠に著けた品にも優る眞珠を投ぜん。いざや王がハムレットの爲に只今祝盃を擧ぐる由を、銅太鼓を鳴らいて喇叭手に傳へ、喇叭をして宮殿外の大砲手に傳へ、即て大砲をして九天の高きに傳へ、九天をして更に大地に傳へしめい。……いざ、はじめい……審判役ども、ぬかるまいぞよ。

ハム　いざ〳〵。

レー　いざ。

と兩人激しく突合ふ。

ハム　一つ。

レー　いや〳〵。

ハム　審判。

オス　あたり、正しうあたり。

レー　よろしい。も一度。

王　まて〳〵。注げ〳〵。……こりやハムレット、この眞珠はおことのぢや。めでたう祝うて飲むぞよ。

王盃中に眞珠を投ずる。喇叭を吹鳴らす。奥にて祝砲の音。

ハムレットに此酒盃をとらせい。

ハム　いや、此一番を果しませう。先づそなたに。……いざ。

と激しく突合ふ。

レー　も一つ。何と？

王　まゐつた、かすり手。

ハムレットが勝たうぞよ。

妃　肥つてゐやれば息が切れう。……これ、ハムレット、此汗拭で汗を拭や。そなたの勝を祝ふ酒盃、妃が乾すぞや。

ハム　かたじけなうおじやるが……

王　ガアツルード、それは！

妃　いえ〳〵、おゆるされい。

王　（傍を向いて）毒を入れた酒盃！　あ、もう手おくれぢや！

ハム　（妃に對ひて）それがしはまだ能う飲みませぬ。やんがて。

妃　こゝへおじや。その汗をふかうずに。

レー　（王に對ひて）今度こそは必ず手並を御覽に入れん。

王　おぼつかないわえ。

レー　（傍を向きて）とはいへ、どうも心が咎めてならぬ。

ハム　いざ第三合。レーヤアチーズ、足下は本氣の立合をおしやらぬな。ある限りの力で突いてお來やれ。予をなぶらうでな。

レー　はて、さやう被言らば……いざ。

ト又激しく突合ふ。

オス　まだ〳〵、まだ〳〵。

レー　しめた。

レーヤアチーズ一突ハムレットを突く。激しき接戰になりて互ひに劍をとりかへ、とゞハムレット一突レーヤアチーズを突く。

王　それ、引別けい！　逆上したと見ゆるぞ。

ハム　いや〳〵。も一度。いざ〳〵。

オス　やゝお妃には……やあ〳〵！

ホレ　や、双方ともに手負の樣子。……殿下、何となされました？

オス　レーヤアチーズどの、こりや何となされましたぞ。

レー　わが係蹄に山鷸の、我れからかゝる身の果。　爭はれぬ惡の報いぢや。

ハム　妃には何となされた？

王　二人が血を見て動顛したのぢや。

妃　いえ〳〵、その酒ぢや、その酒で……おゝ、ハムレットや！……その酒で毒害……毒害にあうたのぢや。

といひつゝ息絶える。

ハム　おゝ、さてこそ奸計！……やあ〳〵！　戸口を固めませい！　二心の者があるぞ！　とく其奴をさがし出だせ。

レー　それこそはすなはちこれに。ハムレットさま、あなたの命ははやなきもの。天が下にありとある如何な靈藥を用ひても、もう半時とは保たぬお命。今お手にある劍こそは、毒を塗つた其上に、切先さへも尖つたまゝ、其奸計の報いは覿面身に返り、御覽ぜよ、まつ此如く窮所の痛手に必死の有樣。御母妃は正しく毒殺。　もはや物が言はれぬ。……王こそは發頭人！

ハム　むゝ、切先に……毒までも塗つたるよな！……ならば見事、毒の効果を！

ト王を目がけて飛びかゝり王の胸元を貫く。

皆々　叛逆！　叛逆！

王　おゝ、助けくれよ、人々。まだ手疵をば負うたばかりぢや。

ハム　やい、おのれ、非倫無慚、殘虐非道のデンマク王……この毒を飲みほしをれ！　おのれの眞珠とはこれか？　母上のあとを追へやい！

と毒を注ぎ入れる。王息絶える。

レー　おのが盛つた毒藥なれば、それぞ至當のおもてなし。ハムレットさま、最期に互ひの罪を赦さん。我々親子の怨は晴れたり、君にも我れをば怨ませたまふな。

と息絶える。

ハム　天其罪を赦したまはん！　後より參るぞ。……ホレーシオ、予もこれまでぢやわい。……あさましい母上、おさらばでござります！　……此慘劇に參じて色を失ひ、慄ひ戰き、一言の白もなき仕出しとも見物とも見ゆる人々よ、われに餘んの時あらば、冥府へ我れを驅立つる死の鞭の手の急ならずば、おゝ、語るべき事、いふべき事……あゝ、それはともかくもぢや。……ホレーシオ、もうこれまでぢや、御身は後に存へて、わが志を知らぬ輩に正當の事を傳へておくりやれ。

ホレ　その仰せには從はれませぬ。デンマーク人とは生ましたが、志はいに

しへの羅馬人にも劣らぬそれがし。幸ひこゝに殘つた毒酒が……

ハム　男なら、渡せ、放せ。これは予が飲んでしまふわ。……おゝ、おゝ！……

ホレーシオ、我が亡き後に如何なる惡名、仔細の知れずば、殘らうもはかりがたい。われを思ふ眞心あらば、しばらく至幸に遠ざかり、憂世に苦しき命延はり、我がために一伍一什を……

進軍の喇叭。　祝砲の音聞える。

オス　や、あの勇ましい物音は？

ハム　あれこそはノールウェーのフォオチンブラスが、只今ポーランドより凱旋の折も折、イギリス國より使節の來著、それを迎ふる禮砲にござりまする。おゝ、ホレーシオ、今ぞ死ぬる！　激しき毒に心氣全く衰へたれば、イギリスよりの知らせ待つ間も保たぬ命。いまはに予は豫めフォオチンブラスを推し立てゝ我國の王嗣と定めう。事のこゝに及びつる始終の仔細を彼の人に何卒語り……おゝ、餘は空寂！

とハムレット息絶える。

ホレ　拔群の御心も今こそは摧けたれ！……ハムレットさま、おさらばでござります。天使の歌に送られて安養世界へ登らせませい。……何とてこゝへ、あの軍太鼓は？

奥にて進軍の樂。　フォオチンブラスを先に、英國使節、軍太鼓、軍旗等を携へさせ、侍臣多勢をぬて入來る。

フォ　それは何處ぢや？

ホレ　何物を御覽ぜうとや？　慘むべきものまつた駭くべきものを見うずとならば、最早尋ねさせらるゝには及びませぬ。

フォ　大破壞を示す屍の山！　おゝ、傲り驕る死の神よ！　如何な饗宴の準備を、地下永劫の庖厨にて、汝が今なさうとはするぞ、かく無慚にも只一彈に數

多の貴人をば射殺すとは？

使節　ても慘ましい光景！　英吉利よりの御消息も時後れとなつたれば、大命の通り、ローゼンクランツ、ギルデンスタアンの兩人が世に無き由を聽かせられうずる耳も聾ひたり。　何處にてか感謝の御言葉をば承らうぞ？

ホレ　王御存命におはさうとも、感謝のお言葉は述べられますまい。　兩人を死罪の儀は、王の御意ではござらなんだ。　それは格別、此大珍事の折柄に、君にはポーランド表より、兩卿には英吉利より、御來朝ありしぞ幸ひ、此死骸どもを高う壇上に据置き、小官御許の蒙つて、まだ仔細を知らぬ世人に、事の顚末を語りませう、かたぐにも聽聞あらせられませい。　邪侈殘忍不倫の行爲、つゞいて不慮の裁斷、まつた思はぬ殺戮、餘義なき苦肉の計略、乃至大詰の此慘事、企みし事の手筈狂うて企める者の頭上に應報せし一伍一什を小官つぶさに辯じませう。

フオ　疾うそれを承らう。　國内の最も身分高き人々をば呼集へい。　愁傷の折柄ながら、予は我運を抱き迎へう。　予は本當國に若干の緣故あれば、此機を幸ひに、宿志を遂ぐる手續せん。

ホレ　その儀につきては、傳へ申すべき事のさふらふ。　すなはち、多衆の同意を引寄すべき御方の御遺言。　さりながら先づ只今の儀を行はせられませい、人心恟々たる今こそ肝腎、さなくば誤解陰謀などにて、何樣の不祥出來仕らんも圖りがたし。

フオ　ハムレットどのゝ屍は、旗頭四人にて、みづから壇上に擔行きせまい。　機をだに得ば、拔群の英主ともなるべかりし王子なれば、武の樂を奏し、兵の禮を施し、其長逝を四方に告げい。……それ、死骸を擔上げい。……かやうな光景は戰場にこそふさはしけれ、こゝにては目もあてられぬわ。……いざ、砲を放たしめい。

死者を送るマーチの曲。死骸を擔荷うて一同入る。奥にて大砲の音。

ハムレット（完）

附錄

「ハムレット」とキッドが作との關係

「ハムレット」と題したる脚本は、シェークスピヤの名を署したる二種の外に、遲くも一五八九年以前に、他の一作ありしと明かなるに似たり。其證は現にシェークスピヤと同時代の作者たるナッシが文中（一五八七年か一五八九年かの出版に係る狂言作者グリーンが著書の序）に「ハムンット」と題したる一作を嘲弄したる語句あり、又同じく狂言作者たるロッヂが一五九六年に公にしたる著書中にも「蠣賣の嬶のやうに情無い聲をして『ハムレットよ讎を復つてくれい』と叫ぐ劇の幽靈」云々と記し、又同じく沙翁と同時代の興行師の一人たりしフィリップ・ヘンスローが日記―こ

は一五九三年より一六〇九年に亙るといふ――一五九四年の條下に「ロオド・チャムバレンお抱への一座ニューイントンの劇場にて『ハムレット』興行の事」といふ一句の記入せられたるに在り。　若し之を沙翁作と別物なりとせば、そも〳〵何者の筆なるべき。　沙翁の「ハムレット」が書肆の目錄に記入せられしは、既に緒言中にも言へる如く、一六〇二年を初めとす。　而して例の四つ折本として刊行せられしは其翌年一六〇三年にして、其扉紙には「ロンドン市内にても數回、キャムブリッヂ、オックスフォオド兩大學其の他にても數回演じたり」と明記せり。　第二の四つ折本（第二版即ち現行「ハムレット」）は一六〇四年に出でたり、これには「デンマーク王子ハムレットの悲壯なる傳記、ウィリヤム・シェークスピヤ作、眞本によりて印刷したる增補本」といふ添書あり。　第一版は三十二葉なるに此版は五十葉より成れり。　そも〳〵第一版は作者の校閲は勿論、許可をだに得ずして出版したるは明白なれども、かくまで長短あり、巧拙あり、筋立までも相違する所あるは、何に原因するか。　出

版者が盜寫の際寫し落したるが爲かといふに、相違の要點が長短や繁簡のみにあらざる故に然りとも信ぜられず。　予の臆測する所によれば、第二版の「ハムレット」と第一版との間には年代上大分の懸隔あるが如く思はる。　近時の沙翁學者の說ける如く、第一版の方は原本「ハムレット」と多少密接なる關係を有するらしく、言はゞ改作にて、其出版の一六〇二年なるに係らず其改作せられしはそれよりも餘程前かたならんかと考へらる。　一說には、改作せしは一六〇一年にして、恰も其頃彼のエッセックスの國事犯事件のためロオド・チャムバレンお抱の一座が朝廷向不首尾となりて困窮しをりしを救ひ旅興行に用立てんが爲なりしならん。（こは「ハムレット」中に旅稼ぎの俳優が「御改革で興行が出來ぬ」云々といふことあるに因みての臆測なるべし。）　文句も脚色も甚しく粗笨なるは急場用の頓作なるが爲なり、故に一六〇三年に旅より立歸りし後現行本の如くに修補したるなり、云々。

併しながら所謂第一版は作者の許可を經ざる書肆が專ら利の爲に盜寫し刊行した

るものなるを思へば、件の作は既に久しく歡迎せられをりし作と見る方當然なるが如し、一六〇一年に旅興行に用ひし作を其翌年に盜寫して出版するは聊か手際過ぎたるに似たり。　沙翁の名を署したる改作「ハムレット」は一五九八年頃既に出來し居りて、原作の「ハムレット」を壓倒し、あちこちにて興行せられ、尙一六〇一年の頃には第二版の如く修補されて旅興行にも用ひられつゝありしを、書肆は利を思ふに急にして、最初の改作のまゝにて出版したるなりと見做すべきにはあらぬか。

『御改革云々』の第一版にはなくして第二版にあるなども其一證と見るべくや。

何れにもせよ、第二版と第一版との間には、出版年月の上に見えたるより以上の時の懸隔あるらしく、又第一版と原作「ハムレット」との間には小少ならぬ關係あるものゝ如し。

以上は出版の歷史上よりの推測ながら、作の內容に就きて觀るも、此作には種々の不審あり、それにつきては嘗て「早稻田文學」に物しおきし講話あれば、下に掲ぐ。

『更に內容の方面から觀ても「ハムレット」は三十七種の沙翁の作中で大ぶ手心を異にしたものである。　沙翁の癖として稍歷史がゝつたものになると、妙に歷史に拘泥するやうな傾きがある、成るべくは傳說の儘を利用しようとするが如き傾向がある。　然るに此作は比較的原傳說を立離れてゐると言へる。　歷史の事實に據つた點は姓名と徒の荒筋だけだと言つてよい。　主人公の性格は勿論、其言ふ事も大分に史實とは相違してゐる所から、そこで此作は作者自身の感想を「ハムレット」に假托して言はせゝのだと言ふ十九世式の評もある位。　例の To be or not to be? の獨白などはさういへば自傳的臭味を帶んでゐる。　演劇術の講釋や劇評などに至つては此場の王子其の人よりも作者其の人に近い。　要するに、主人公の性格が如何にも多面的で、傳說的の人物と見えると同時に、作者の心的閱歷を暗示した一種抒情的の人物とも見え、多血的神經質の詩人肌の空想家とも見え、多少病的な併しながら如何にも複雜な性格を有した天才者とも見え、彌〻詮じ詰めてゆくと到底

實際には有りさうにもない純然たる想像上の拵へ物かとも見える程なのは、其の由つて來る所、疑ふらくは此作の一種特別な歴史にあるのではあるまいか。 在來の批評家達に言はせると ハムレット の性格は全く沙翁の獨創力によつて意識的に作られたものであるのだが、或は其幾分は寧ろ前の作から傳襲的に半無意識的に作り出だされたのでは無かつたか。 改作し訂正し補修して行く間に何時と無くハムレットの性格が變遷して最初は頗る單純であつたものが怖しく複雜になつたといふやうな事があつて、見やうによつては稀有な併しながら幾らも世にあり得べき天才肌の、逸常識な人物とも見え、それに筋立が筋立ゆゑ眞狂か佯狂かなどゝいふ問題が纏綿して彌〻以て複雜になり、かてゝ加へて沙翁が特得の讀者を魅し去つて、何時の間にか恍惚たらしめてしまふといふ筆の魔力が働いて、批評家など名宣る人々さへ、果は頭が混雜して、つい我知らずイリヰガの理窟評に陷るやうになつたのでは無いか。 それは何れにもせよ、今日では ハムレット の性格評に取

掛る前に先づ一應トマス・キッドといふ作者の事を取調べて見る必要がある。 キッドが書いたらうと假定さるゝ其の「ハムレット」は傳はつてゐないが、幸ひに其の名作と評判の「スパニッシ・トラジェディー」は殘つてゐる。 第一版の「ハムレット」と此作とを比べて見ると思ひ半ばに過ぐることがある。

先づざつとキッドの身の上を話さう。

十九世紀も半頃までは誰一人キッドを口にするものも無かつたのだが、其末に近づくにつれてキッド研究が盛んになつた。 それは此作者が沙翁以前に於ける最も人氣のあつた作者だといふことゝ、前に言つた最初の「ハムレット」の著者だらうといふことゝが元である。 フレデリック・ボアス氏のキッド全集(一九〇一年版)は同氏の緒論も附いてゐて重寶である。 以下キッド及び原作「ハムレット」に關することは主として同氏の說に依る。

キッドは五十年間も人氣を持ち續け、劇場は勿論、讀書界にまでも持囃され、其名作

「スパニシ・トラジェディー」(西班牙悲劇)の如きは和蘭や日耳曼でも翻案して登場したといふ。十七世紀の中葉ピューリタン宗徒全盛時代になつて漸く棄てられたといふことだから、沙翁の眞盛りにも尙地方などでは歡迎されたものらしい。其作柄は粗笨な淺薄な殺伐なもので、八文字屋本の小說や初期の草双紙などに似てゐる。其の狂言作者として持囃された鹽梅は我が南北物、默阿彌物といふ格。沙翁の傳さへも善くは傳はらぬ位だから、キッドの履歷なぞは勿論よくは解らない。一五五八年に生れて一五九四年か九五年かに死んだといふ事だけは慥かだ。別段組織だつた敎育を受けたとは無く主に獨學的に種々の知識を得てゐたのだといふ事は其作によつて推測される。ルネサンスの當時拉典文學流行時代の事とて何でも盛んに名作の拉典劇を讀んだものらしい。恰も支那小說の流行つた德川時代に三馬や京傳迄が半分方は拾ひ讀ながら唐本類を漁つたと同じ道理。キッドが最も熱中して師表と崇めてゐたは拉典の作家中でも特にセネカであつたらしい。

「西班牙悲劇」の如きにはセネカの影響が歷々としてゐて、白中の名句なども彼れから敷寫しに譯し來つたのがあるとボアスが指摘してゐる。尤も其頃はセネカ流行で、苟も劇を口にするものでセネカを振廻さなんだものは無かつた、言はゞセネカは十九世紀劇壇に於ける沙翁といふ位置にあつた。で、セネカ劇の翻譯も既に幾らも行はれてゐた。キッドの同輩ナッシといふ作者が「近頃は英譯のセネカに精通した名作家があつて云々と冷評したのは、多分キッドを譏刺したのであらうといふ事。併しキッドはボアスの說によれば決して英譯に依つてのみ拉典劇を味ふといふやうな無學者では無く、自由に拉典文をも書き得たらしい、又ヴァジルなどの名句をも自在に引用するだけの學識があつた。されど獨學の悲しさには古代史や近代史の知識は乏しく、それがため時々妙な誤譯や間違をしたので專門家側の嘲笑を招いたといふ。「西班牙悲劇」の序幕中に言はせてあることなども事實とは違つてゐるのである。

「西班牙悲劇」の原版は幸ひにして三種まで傳はつてゐる、一は大英博物館本で、これには日附が無く、二は一五九四年出版の四つ折本、三は一五九九年版の四つ折本であるさうな。（僕は主として Schick といふ人が序と少しの註と字彙とを添へて校訂し出版したので讀んだ、ボアスの全集とはチョイ〳〵異つてゐる所がある。）

此作の出來た年代は、早くも一五八五年、遲くも一五八八年といふ間であらうといふ說。　といふのは作の形式も內容も共に其頃の常套（コンヴェンション）で出來てゐる、例へば一行々々で讀切になるやうに無韻律語（ブランクヴァース）を綴る筆癖と言ひ、夥しく頭韻を用ふることゝ言ひ、屢〻押韻することゝ言ひ、妙に古風な語を點綴する癖といひ、拉典語の挿入と言ひ、アルマダ艦隊に關する當込と言ひ、何れも其頃の作たることを證してゐるからである。　さて然らば所謂原作の「ハムレット」は果して此作者の作であるかといふに、先づ當時の記錄に據ると、何でも一五八六年頃に英吉利の俳優の一座がデンマークの王家から招かれてエルシノーアの宮中で幾回か劇を演じ、一五八九年の秋

に歸國したといふ事實があるさうだ、ところで彼のナッシが嘲弄の語を洩したのは此年だから、若しキッドが「ハムレット」を書いたとすれば此歸國前後であつたに相違無く、其世界がデンマークの有名な歷史的事實で、主な舞臺面がエルシノーアの王宮であり、又そこへ旅役者が參會し王子の命で宮中に劇を演ずることがあるなぞは如何にも因緣が深く、右の臆測の事實に遠くないことを保證してゐるやうにも思はれる。　今日傳はつてゐる第一版の「ハムレット」とキッド作の「西班牙悲劇」とを比べて見るに、筋立や仕組に於ても、人物の取合せ方に於ても、詞句の筆致に於ても、似てゐる點が著しい。　先づ筋の上を言はうに、「西班牙悲劇」でも西班牙と葡萄牙との間に公使頻に來往して談判する事があつて國際問題が一關鍵となつてゐるが、「ハムレット」でもデンマークとノルウェーとの間に同樣の事がある、前者では副王の嗣子が捕虜になつてゐるので談判が始まり、後者ではノルウェー王の甥の謀叛が問題の因となつてゐる。　西班牙悲劇には將軍の子ホレシオと西班牙の公主

ペルイムビリヤ姫との薄倖の戀があり、「ハムレット」にはオフィリヤの哀れな戀がある。ペルイムビリヤ姫の兄は姫とホレシオとの仲を裂き、ポローニヤスとレーヤアチーズとはオフィリヤに戀を思ひ切れと意見する。兄は何方の劇でも多少殘忍な男で、又二人とも一時バリーに往つてゐた者で相手の王子とは敵同士である。それから「ハムレット」ではハムレットとレーヤアチーズとが二人ながら父の仇を復せんと欲し、「西班牙悲劇」ではヒエロニモといふ將軍とバジュルトーといふ老人と二人ながら其子の仇を報いたいと志す。そればかりでない、双方共劇中劇といふ脚色が用ひてある。剩さへ雙方とも復讐の手段として劇を演ずるのである。尤も「ハムレット」では劇中劇を演ずる者は主人公が舊知の俳優であり、「西班牙悲劇」では男主人公ヒエロニモ自ら扮して劇の仕草に事寄せて仇敵を皆殺しにするといふ仕組だから、脚色の鹽梅は全く違ふ。其他前々に並べた類似も單に關係が似てゐると言ふだけ若しくは捕へかたが似てゐるといふまで、人物の性格も著しく違へば段取や味ひは丸で違ふ。併し古い淨瑠璃の仕組が似通ひ、草雙紙の脚色が相類してゐるほどには似通つてゐる、蓋し斯ういふ人物や斯ういふやうな筋や關係やが其頃の人氣に叶つたのであらう。無論此第一版の「ハムレット」は沙翁の改作に係はるものだから、キッドの原作とは餘程變つてゐるものであらうが、それですら是程には似てゐるとすると、所謂原作は更に一段「西班牙悲劇」に近い點があつたでもあらう。果してそれは如何なであつたらう。

茲に一八五七年の頃獨逸の學者で所謂原作「ハムレット」に最も近からうといふ作を紹介した人があつた。其作は今寫本で傳はつてゐるので、外題は「兄殺しの應報」とあつて、一説には一六〇三年頃に英の旅役者が獨逸へ來た時分に持つて來たのが傳はつたので、是れこそ原作「ハムレット」其物で無いまでも、ほぼ其面影を止めた者であらうといふ推測が一時大ぶ勢力を得た。幸ひ此「兄殺しの應報」の英譯はファアネスの集註に載せてあるから、第一版の「ハムレット」とも「西班牙悲劇」とも

比較して見ることが出來る。　併し沙翁學者達がおひ〳〵研究を重ねた結果、此獨逸の「ハムレット」は恐らく第一版の「ハムレット」を後に獨逸の其頃の式に引直したものたるに過ぎぬであらうとの說が勝を得て來たといふ事で、つまり原作「ハムレット」は今以て如何なものやら解らんで終つてゐる。　第一版本の「ハムレット」には慥かにキッドの手跡が見えるといふ事さへも學者によつては異存がある。　例へばダウデン氏の如きはそんな事はない、悉く沙翁の筆だと言つてゐ、ボアス氏は一々證句を擧げてキッドの筆致と似てゐる所以を證明せんと試みてゐる。　何れにもせよ、沙翁はその壯時に於ては、譬へば先づ木下藤吉郎のやうな男だ、信長に比すべきマーローに師事して、時に柴田、瀧川、丹羽、佐久間などに比すべきグリーンやキッドやピールやの長所を觀察し、必要に當つては(或は半無意識かも知れんが)隨意に之れを攝取することを別段不見識とは思はなんだ跡が見える。　グリーンが例の惡言を放つて剽竊呼ばゝりをしたのも一理あることかと思ふ。　其初期の作と

假定せらるゝ「タイタス・アンドロニカス」がキッドの作風に酷似してゐるのを考へれば、キッドの作を改作するなど言ふことも無さゝうな事では無い。　原作の「ハムレット」はキッドの作であつたにしても「西班牙悲劇」のやうに歡迎されなんだとは慥かで、無論印刷に附せられたことなどは無く、一五九四年にヘンスローが再興して登場したが不當り、次に一五九六年に一回、一六〇二年に一回の興行をしたが、何れも大した當りでは無かつたらしい。　つまり沙翁が手を入れたまで凡そ十五年間程は中間ぶらりの脚本、其間に定めし彼方此方と色々の興行人の手に渡り、色々の作者の手にも觸れ、臺帳は幾たびも添削されたでもあらうといふ事。　ベン・ジョンソンが「西班牙悲劇」を敷衍して上場し大當りを博したことがあるといふ事實に照らしても此說は中らずと雖も遠かるまじく、或はジョンソンの向うを張つて一六〇二年頃に既に幾たびか手の入つてゐた原作「ハムレット」に沙翁が手を入れたのでは無いかといふ評、それこれ考へ合せて見ると、今の所謂「ハムレット」には隨分長い

複雜な履歴がある譯で、無論其眞價値は一へに沙翁が獨特の大想像力に由來するのであるのだが、其筋立や主人公の性格やが妙に神秘的に込入つてゐる仔細に至つては寧ろ此履歴を參照して解釋したはうが當然かと思ふ。　極言すれば「ハムレット」の筋立と其主人公の性格だけは個人によつて一時に製作されたと言ふよりは多人數の手に渡るうちに自然に化醇(エテルウ)したと言つたはうが當つてはゐまいか。　言ふまでも無く今のハムレットの性格に纏綿する深邃な心理的感興は主として沙翁が獨創である、彼の第一版では特に近世的と見做すべき程の性格でも無かつた主人公を、ゲーテ、コールリッヂ以下種々の精緻な、時としては過巧な分析に相當するやうな病的情意の不可思議な人格に仕立上げたのは、それは勿論沙翁の力だが、尙其の如何にも複雜で混沌としてゐて、處々(ところ〴〵)は矛盾し、狂とも見え佯狂とも見え、薄志とも見え、勇敢とも見え、情深くも見え、殘忍にも見え、つまり批判する者の心々で千差萬別ともなりかねないのは、一つは此作が一個人の頭腦のみから生れてゐ

ないからでは無いか。　又此作が學者受、見功者受がよいばかりで無く、如何なる社會の讀者觀客にも喜ばれるといふのも、同じく種々の要素の結合、種々の頭腦の貢獻から成つてゐるが爲であらう。　トマス・キッドが草雙紙式狂言作家としての舞臺的技倆に加ふるに、幾多實演上の經驗にもとづいたる添削、それに附け加へて大沙翁が雄大な想像、精細深刻な心理觀察、及び其空前にして殆ど絶後とも評すべき靈妙富贍、縱横自在の詞句(ことば)の音樂、それやこれやが融會混合して渾然たる一塊と成つたのが今の「ハムレット」だとすれば、此作の企及しがたき理由も解しがたくなく、其の何となく矛盾の素を含んでゐるやうに感ぜらるゝ理由も解しがたくなく、其の主人公の性格が今尙疑問となつてゐる理由も解しがたくない。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何れにしても今は最早ロマンチシズム全盛時代に行はれたやうな主觀的批評を主にして論理的遊戯に耽る時代ではない。　其たぐひの批評にも興はあり、利もあら

うが、特に劇としての研究には何等益する所のないことを記臆せねばならぬ。

明治四十四年十二月二十二日印刷
明治四十四年十二月二十五日發行
大正五年五月十五日一版發行
大正七年八月十一日二版發行
大正八年八月十五日三版發行
大正九年四月二十日四版發行
大正十年十一月十五日五版發行
大正十一年十月十一日六版發行
大正十二年十二月十一日七版發行
明治四十四年十二月二十二日再版發行
明治四十四年十二月二十五日發行
明治四十四年十二月二十五日印刷
明治四十四年十二月二十五日發行
明治四十四年十二月二十五日二版發行
明治四十四年十二月二十五日三版發行
明治四十四年十二月二十五日四版發行
明治四十四年十二月二十五日五版發行
明治四十四年十二月二十五日六版發行
明治四十四年十二月二十五日七版發行
明治四十四年十二月二十五日八版發行
明治四十四年十二月二十五日九版發行
明治四十四年十二月二十五日十版發行
大正二年六月十五日發行

（不許複製）

附錄トシテレムプ
正價金貳圓五拾錢

譯者　東京市牛込區余丁町百十四番地　坪内雄藏
發行者　東京市牛込區辨天町百五十七番地　種村宗八
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎

發行所　東京市牛込區早稲田　早稲田大學出版部
（振替口座東京一一二三番、大阪六八九〇〇番）

〔日清印刷株式會社印刷〕

文學博士 坪内逍遙 譯

沙翁傑作集（第一編）

ハムレット

（十八版）三色版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵税十二錢

此劇は沙翁の作三十七篇中の最有名なもので、苟も文化國の片端に列してゐる國で、此作を譯してゐない國はない。此作に關する出版物だけで立派に一圖書館が出來る。だから、此作を讀まれば耻だと云つてゐる譯者は今から十三年前、之を此傑作集の手初めに譯したが、其頃はまだ口語體が今ほど行はれてゐなかつたから、大苦心で雅俗折衷體に譯したこに特殊の趣味がある。そもそも、專門家でない以上、註釋書なしでは讀めぬ位むつかしい。本譯には此原作に關する譯者獨自の研鑽の餘になつた一大論文が添へてあり、尚雅致に富んだ挿畫數十個（精巧な木版）及び美麗な三色版（名優アーヰングの扮したハムレット）が載せてある。

沙翁傑作集（第二編）

ロミオとジュリエット

（十一版）寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵税十二錢

これは純粹の戀愛悲劇としては沙翁の作中唯一の物で、劇としては勿論、オペラとして、活動寫眞として、絶えず繰返して演ぜられる。十四歲の處女と詩人肌の青年の不幸な情死譚で、原文はハムレットに劣らず讀みにくい。殊に比喩や口合や洒落が夥しいのを、それを雅俗折衷體で譯した點に非常の苦心と特色がある。沙翁の若い時の作だから、いかにも若々としした麗はしさが全編に溢れてゐる。口繪、挿繪の豐富はハムレットと同例である。

發行所 東京早稲田牛込 早稲田大學出版部

賣捌所

東京神田 富山房
東京神田 東京堂
東京日本橋 至誠堂
東京京橋 北隆館
東京京橋 東海堂
大阪東區 盛文館
名古屋市 星野書店

（其他各地書肆）

沙翁傑作集（第三編）

オセロー

純粹の家庭悲劇たる點に特色があつて、作者死後三百年の今日讀んでも、極めて深刻な同感を牽く。そこに近代劇然たる趣味情調がある。或は之を沙翁の最傑作だと評する者もある。黑面將軍と白皙の淑女との切なる戀、それを破壞するために讒誣奸謀を逞うする人面の惡魔を書いたといヤゴーの描寫は古今獨歩で、例のゲーテすら之に暗示を得てファウストの惡魔を書いたといはれる。三色版の口繪、例の數十葉の挿繪、いづれも譯文と相照らして其舞臺面を髣髴させる。譯もずつと現代語に近づけてあるから、「ハムレット」や「ロミオ」よりも分り易い。

（八版）
三色版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁傑作集（第四編）

リヤ王

所謂沙翁の四大悲劇は此作と「ハムレット」と「オセロー」と「マクベス」とであるが、或評者は之を其中の最傑作だといふ。とにかく我國人は老若とも最も深い感興を以て讀むのは此作であらう。といふのは、此作は主として親子間の情操を取扱つて、外國には孝道がないなどといふ輩を一掃破して東西至情の一揆に驚かしむるものがあるからである。しかるに思ふ程に利己的個人性や自然主義的不孝漢が寫されてゐるかから面白い。たのみならず、眞狂人と戲狂人とが相絡んで活躍する趣味が無類である。乞食の國王が一朝にして同樣の狂人になるといふ筋。全く規模の雄大な悲劇である。譯語がずつと現代的、口語體的になつてゐるから讀み易くて、一層面白い。

此作以下は、

（六版）
三色版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

發行所 東京牛込田稻早 早稻田大學出版部

沙翁傑作集（第五編）

ジュリヤス・シーザー

沙翁の作中で、政治的興味を中心としたのは此作以外に、もう一種あるきりである。これは羅馬の史實を其のまゝに取扱つた活歴劇なのだが、大詩人の作だけに、千九百年前が目の前に躍るやうである。大英雄シーザー、其政敵カシヤス、其義弟同樣のブルータス、アントニー、此四者の性格の對照が妙を極めてゐる。殊にシーザー死後の大演説の場は今人の血をすらも沸騰せしめる。男性的悲劇とは是れであらう。學校の教課書として最も適當だとせられてゐる。且つ最初に讀む沙翁の悲劇として適當である。

（八版）
寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁傑作集（第六編）

ヴェニスの商人

明治の十四五年頃に「人肉質入れ裁判」といふ外題で演ぜられたものゝ原本で、今では男裝の淑女ポオシヤ、强慾の高利貸シヤイロックの名を知らない芝居好きは日本中にない位だらう。此作以下は譯者が全く純粹な口語體で譯されたから、註釋がなくては外國人にすら讀めぬ此作が丸で近頃の日本の創作のやうに讀める。沙翁の作は一も讀者を失望せしめないといはれてゐるが、本傑作集も大丈夫、買つてから、あゝ買はなければよかつたと後悔なさる必要はないと保證する。

（七版）
寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

發行所 東京牛込田稻早 早稻田大學出版部

沙翁傑作集（第七編）

テムペスト

（六版）寫眞版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵税十二錢

この作は沙翁の絶筆だといはれてゐる。それに關しては卷末に譯者が多年の研究考察になつた一大論文を附錄として添へてあるが、成程さうかも知れない。いかにも豐潤な、深刻な而も綽々たる餘裕のある夢幻的な高雅な喜劇である。前六種の作とは全く趣味情調を殊にしたロマンチックな喜劇で、妖精が出る、半人半獸の怪物が活動する、神仙のやうな人物、男を生れてからまだ二人とては見てゐなかつた處女がはじめて戀を知るなど、感興盡くる所がない。

沙翁傑作集（第八編）

アントニーとクレオパトラ

（六版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵税十二錢

沙翁の偉大なのは其作の彌〻出でて彌〻傑特な點にある。作意の變化して窮らない所にある。此作は其作才の爛熟期の最後の傑作で、巧みに世界的悲劇の契機を捉へて「全世界に君たらんか、熾烈なる肉的戀愛を全うせんか」といふ大デレンマに逢著した英雄的放蕩兒が功名の末路を活寫したもので、所謂四大悲劇以外に一新機軸を出だし、諸評家をして沙翁作中の最大驚異と推賞せしめた。殊に、妖女王の性格の描寫は眞に驚異中の驚異で、古今空絶である。其間に丸で漢楚軍談でも讀むやうな男性的、政治的な興味が漲る。

發行所　東京牛込　早稲田大學出版部

文學博士　坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第九編）

眞夏の夜の夢

（五版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵税十二錢

大沙翁の多方面な天才の空想的側面の代表作としては、此上もない醇乎として醇な作である。先づ「テムペスト」に似たものだといへるが、若い時分の作だけに、更に愉快、更に奇拔、更に微妙、更に飄逸である。五幕十幾場、其三分の二は悉く夢であり、幻である。想も夢幻的であり、調も夢幻的である。いろ〳〵な妖魔が頻に跳梁して恋に人間を翻弄する。人妖が錯綜するが、それが極めて自然である。理窟を全脫して、而も條理が整然としてゐる。艷情があり、滑稽があり、葛藤があり、悲喜がある。忽ち喜劇、忽ち笑劇、忽ち歌劇、絶對無類の脚色。

沙翁傑作集（第十編）

マクベス

（八版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵税十二錢

所謂四大悲劇の一つで、沙翁が技倆の圓熟期の作である。ドストエフスキーの「罪と罰」の結構を更に雄大にし、さうして劇化したやうな名篇である。或は「ハムレット」以上、「オセロー」以上、「リヤ王」以上と稱せられる。わが國へ來た此劇の活動寫眞ばかりでも三種以上あつたらう。それほど傑れた作である。特に本編には、附錄として、譯者が「日本に於ける沙翁研究、飜譯、飜案及び上演の略誌」を添へた。これは我國での沙翁研究の沿革を精査したもので、著譯書とも、其年順、書名、著譯者の名、發行所の名を明かにし、其上演に就いては、其年月、外題、譯者、俳優、劇場までも詳かにしてある。沙翁研究者の必讀を要する。口語體で譯されてあるだけに、所謂四大悲劇中では、これが一等讀み易いであらう。

發行所　東京牛込　早稲田大學出版部

沙翁傑作集（第十一編）

火尺報尺

本篇は沙翁が作中で最も皮肉な喜劇と特稱せられるものである。沙翁にも得意時代、失意時代があつたのだが、これは其悲觀時代の一名作で、現實曝露的な所に一味ショーやブリューらの近代劇と相通ずる皮肉味がある。附錄として、特に難句解が添へてある。印刷、口繪、挿畫、裝釘、其他一切前例の通り。此事は一々これからは斷らないでもあらうが、同例だと信じて下さい。

（三版）寫眞版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

沙翁傑作集（第十二編）

冬夜たのしゝ

つい先年英國の劇作者、舞臺監督者のバーカーが最新式の上演をやつて大評判になつた沙翁の最晩年の最練熟した技巧に成つた作である。今尚舞臺上で必ず成功する不思議に歐舞伎劇式の世話と時代と喜歌劇的氣分との混淆した夢幻劇である。四大悲劇ぐらゐでは萬魂の沙翁は分らない。斯ういふ作を含味しないうちは沙翁を語る權利がない。わが國の默阿彌などの講釋種のお家騷動物に一寸似た筋立であるが、其詩としての品位は比べ物にならない。

（四版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部

文學博士　坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第十三編）

リヤード三世

沙翁が習作時代の傑作で純粹の正史劇の標本で、わが國でいふ活歷劇に相當するが、同じやうに正史本位で書いても、我國の作者とはどんなに違ふか、此一作だけによつても分る。主人公は王族でありながら傴僂で、容貌のおそろしく醜い惡魔的天才である。作者はニイチエが大發見らしく唱へた例の逆道德の骨子を、もう既三百年前に此主人公に道破させてゐる。エリザ劇勃興當時の代表作で、既譯十二編とは全く撰を異にしてゐるところを熟讀なさい。

（三版）寫眞版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

沙翁傑作集（第十四編）（第十五編）

ヘンリー四世

沙翁の史劇中の最傑作である。第一、第二と二部に跨つてゐる長篇で、英國の内亂を舞臺面にした勇壯激越な政治的悲劇と、自然の滑稽で人の頤を解く極寫實的な、今尚躍り動くやうな市井風俗の喜劇とが、無縫の天衣のやうに、巧妙を極めて織り交ぜてある。沙翁貶罵者の棟梁であるトルストイやショーさへも、此作の喜劇部面だけには全く我を折つて、不易の妙味があると賞めてゐる。殊にフォールスタッフといふビール樽の化物のやうな放蕩武士の性格描寫は古今獨歩である。ハムレットを沙翁の傑作だといふが、其實、あの性格は大分不自然でも不純でもある。フォールスタッフは、純で、自然で、其性質の複雜な點に於ては、優にハムレットに匹敵してゐる。評者の多くはクレオパトラか沙翁の女性描寫としても、作としても彼れの作中の驚異だといふが、フォールスタッフに至つては、男性描寫として、優に他のすべてを凌駕してゐる。

（再版）三色版口繪入　木版密畫多數入　各册貳圓五十錢　郵稅十二錢

發行所　東京牛込早稻田　早稻田大學出版部

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第十六編）

お氣に召すまゝ

（再版）三色版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁が幸福に暮らしてゐた得意時代の作であるので、彼れの喜劇中の最も陽氣な、最も愉快な作だと稱される。讀む者も自然と暢氣な晴々した心持になる。「牧歌的」と特稱される作である。田野山林の詩趣が横溢してゐる。或部分は品のよい喜歌劇とも見られる。舞臺が主として深林中なので屢〻野外劇の脚本にもされる。清浮な、無邪氣な、可憐な、高雅な作意であるから、外國では女學校の餘興用に歡迎してゐる。既譯十五卷中のどの作とも違つてゐる處に此作の特色がある。

沙翁傑作集（第十七編）

ちがひ棚劇らしく

寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁立身前後に流行つた、ファース仕立の思ひ切つて變から式な喜劇の代表作である。其れ自ら一喜劇である開幕劇へ、本筋の喜劇を編み込んだ趣向が、先づ最も珍らしい。雷聲が雷娘を難なく征服する段取に至つては更にをかしい。下思議に今も尙歡迎される喜劇である。我國では其幾場かは飜案された。本譯には例の挿繪以外に特に名優の寫眞數葉を挿入した。沙翁の喜劇中の最も分り易いのから讀みたいと望む人は、先づこれからお讀みなさい。

發行所 東京 早稲田 牛込 早稲田大學出版部

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第十八編）

十二夜

寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

既刊「お氣に召すまゝ」の姉妹篇である。孿生の同胞の女の方が故あつて男裝してゐるのが間違ひの種になる作意である。此間違ひを骨子とした點だけは作者の習作期の或作に似てゐるが、劇詩としての價値は無論數等優つてゐて、沙翁が作中、喜劇としては最も純粹なものと稱せられ、今尙愛讀もされ、實演もされる。既刊のどの作とも異つた味だから、之を讀むと沙翁の創作力の彌〻出でて彌〻無盡藏なことが分る。上品な滑稽、高雅な戲謔の上乘である。

沙翁傑作集（第十九編）

コリオナス

寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

ニイチエの超人道德の標本のやうな傲岸不敵の一貴族を中心にして、其周圍に渦卷くアリストクラツト對プロレタリヤの黨爭を經緯とした作であり、專ら男性趣味と政治的感興で終始し、一の挿話をも一の戀愛情味をも粧點しないで鋭く性格悲劇としての筋を一貫したのが沙翁集中の異例である、特權階級の專横、武斷政治の弊、平和と戰爭の得失、所謂多頭の怪物たる群衆の騷動、選擧期に於ける俗政治家の戸別訪問等、ところ〴〵現代に對する批判や諷刺が皮肉にも穿寫されてゐるのが面白い。

發行所 東京 早稲田 牛込 早稲田大學出版部

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第二十編）

シムベリン

沙翁が最晩年の三大ロマンチック劇の隨一で「テムペスト」や「冬の夜話」の姉妹篇です、女主人公イモーセンは作者の理想的淑女だと推想される、筋も脚色も趣味情調も不思議に我歌舞伎劇に似てゐる、本篇は當飜譯集の最終卷だから譯者が過去十六年間の工夫を語る長篇の飜譯苦心談が添はつてある、それは世のクラシックを讀む人及び譯する人の絶好指針です、例の通り豐富な挿畫、コロタイプの口繪が三葉、エレンテリーのイモーゼン、青年期のゴルヅンクレーグの王子など

この沙翁傑作集は、嘗て一九二二年の春、英國皇儲御來朝の際、記念品として、わが早稲田大學から親しく捧呈したものであつて、こゝに我國も世界文化國の一としての存立を明示するに至つた。我々は文化國民としての歡喜を知ると同時に、譯者坪内博士の功績を永遠に禮讃したい。

四六判美裝
口繪及挿畫多數
定價貳圓五拾錢
郵稅十二錢

發行所 東京牛込 早稲田大學出版部

坪内逍遙著

兒童教育と演劇

定價壹圓八拾錢
郵稅八錢

藝術教育は現代の一大 WATCHWORD です、併し其理論と其實際とが兎角離れ〴〵になるので存外其效果が擧がらない、本書は其弊を救ふために書かれた第一書です、主として婦人のために說かれたのだが、苟も家庭乃至初等教育に志ある人々の必讀書です、其要目は（一）現世紀の三特徵（二）現代に於ける女性の任務（三）遊戲の藝術化（四）兒童劇の進化（五）兒童劇の種類及び使命（六）兒童劇の效用（七）兒童劇に對する種々の杞憂（八）兒童劇の扱ひ方（九）結論

東京牛込 早稲田大學出版部
振替東京一一二三

エ1A83

坪内逍遙博士著

小川治平氏
宍戸左行氏畫

家庭用兒童劇

第一集
第二集
各貳圓貳拾錢
郵税各八錢

美麗を極めた裝釘、色刷口繪、見返し繪、其他挿畫多數

此兒童劇は四五歳以上十三四歳までの子供達の爲に博士が特に家庭用として其高遠な教育的見地から書かれたものです、容易に子供達自身で演ぜられます、殊に手輕に手製の出來る澤山の假面を利用して、紅や白粉を塗らないで演ぜさせる趣向に至つては、古今内外に前例のない斬新な考案です

（大坂中央公會堂、東京有樂座、帝國劇場及び全國各地小學校に於て實演）

附錄―畫用紙で自製の出來る假面の作り方　坪内博士指導　宍戸左行氏案

東京牛込　振替東京一一一三二　大阪六八九〇〇

早稲田大學出版部發行

終